

JIU 日本語教育実践報告集

JIU Journal of Japanese Language Teaching

5 号

城西国際大学 日本語教育担当

2024 年 3 月

【目次】

JIU オンライン日本語授業の開発

..... 尾本 康裕・高木 美嘉

日本語能力に差があるクラスでのプロジェクト学習の試み ―受講生の振り返りから―

..... 佐藤 明子

非言語を言語化する「言語・非言語コミュニケーション論」の実践報告

..... 鈴木 一徳

ARCS モデルの考えを取り入れた「日本文化研修」の試み ―学習者の学習意欲向上と日本文化研修の教育の向上を目指して―

..... 高柳 真理

山武市外国人児童生徒の日本語支援としての交流活動 ―学部ゼミ生の事例から―

..... 林 千賀

JIU オンライン日本語授業の開発

尾本 康裕・高木 美嘉

Development of JIU online Japanese language classes

Yasuhiro Omoto・Miyoshi Takagi

【要旨】

近年、世界の大学において、急速にオンラインやオンデマンドによる授業が一般化した。その理由としては、まず、インターネットの普及や高速化というテクノロジーの向上によりオンライン授業が実現しやすくなった、という技術的な側面が挙げられる。さらに、COVID-19 が引き起こした世界的パンデミックという緊急事態において、学習を支える重要な手段として機能したことも、その普及に拍車をかけたといえるだろう。こうした技術的な要因や社会的経緯を経て一般化したオンライン（オンデマンド）授業を、今後さらに質を上げるために取り組むためには、今一度ここで課題を整理し、今後の方向性を考える必要があり、本学も例外ではない。今後、本校が国際大学としてさらにグローバルな教育を展開していくためにも、留学生の日本語学習を安定して支援するオンライン（オンデマンド）授業を開発し、実行する必要があるだろう。本稿は、その第一歩として、留学生のための日本語学習のオンライン及びオンデマンド授業の開発上の課題と今後の開発計画について述べるものである。

Abstract

In recent years, online and on-demand teaching has rapidly become common in universities worldwide. This is due, first, to the technological aspects of online teaching, which have been facilitated by improvements in technology, such as the widespread use of the internet and its higher speeds. In addition, the fact that it served as an important means of supporting learning during the global pandemic emergency caused by COVID-19 may also have contributed to its widespread use. To work towards further improving the quality of online (on-demand) teaching, which has become commonplace through these technological factors and social processes, it is necessary to sort out the issues here once again and consider the future direction, and our university is no exception. For our school to further develop global education as an international university in the future, it will be necessary to develop and implement online (on-demand) classes that provide stable support for international students' Japanese language learning. As a first step, this paper describes the challenges in the development of online and on-demand Japanese language classes for international students and the future development plan.

キーワード： オンライン授業、オンデマンド授業、留学生、日本語学習

1. はじめに

城西国際大学（以下、本学）において、留学生のための日本語科目がオンライン及びオンデマンド授業

が全学的に始まったのは、COVID-19 のパンデミックによって留学生の来日が困難になった 2020 年 5 月（注 1）からである。それまで、日本語科目のオンライン及びオンデマンド授業は行われておらず、文字通り白紙からの授業設計、授業実践となった。このように、パンデミック時のオンライン及びオンデマンドの日本語の授業は、緊急性を帯びたものであり、事前の準備や計画よりは、教育実践を重ねながら計画実行を繰り返して作り上げる必要があった。しかし、今後、本学で日本語のオンライン及びオンデマンド授業を行うことを考える上では、パンデミック時よりは計画的かつ戦略的に取り組むことで、教育の質を向上させ、教育的にも社会的にも安定した成果を上げられるものにしなければならないだろう。

2. 日本語のオンライン授業の動向と課題

パンデミック以後の日本語オンライン授業の計画立案の参考になるのは、すでに国内の大学で行われてきたオンライン日本語教育事業の事例であろう。2 章では、国内の大学におけるオンライン及びオンデマンドの日本語授業（プログラム、コース、コンテンツ等）の先行事例を概観した上で、その一連の事例から見えるオンライン及びオンデマンド授業（プログラム、コース、コンテンツ等）の設計上の留意点を整理し、本学の今後のオンライン及びオンデマンドの日本語授業（プログラム、コース、コンテンツ等）の可能性について考察する。

2. 1 大学の取り組みの事例

① グローバル MOOCs の「Japanese Pronunciation for Communication」

戸田（2017,2018）によると、筆者ら早稲田大学の研究チームは、グローバル MOOCs (Massive Open Online Courses) の edX（注 2）において 2017 年に「Japanese Pronunciation for Communication（以下、JPC）」という日本語の発音に関するオンライン授業を開講し、世界中の日本語学習者に無料配信を開始した。その結果、170 の国や地域から登録があり、2018 年 4 月の時点で受講生は 33,500 名を超えていたという。開講当初の 7,800 名から 1 年間で飛躍的に受講者数が増加しており、パンデミック以前から、オンライン日本語学習のコンテンツに世界中から高い関心が寄せられていたことが伺える。

戸田らは、このオンラインによる発音の授業に関する実践研究を重ねて行っている。例えば、JPC のオンライン講座が始まる前に、その授業目的やカリキュラムデザインの構想について報告している戸田他(2016)によると、このオンライン授業の授業目的について、講師からの一方的な講義に留まらず、学習者が主体的に発音練習を継続することができるようになることと定め、授業目的を達成する機能を充実させると述べ、全 5 回のオンライン授業の構成について次のような柱を立てている。

- 1) 本編:講師による講義映像・ゲストによるインタビュー映像
- 2) 会話で学ぶ日本語発音&カルチャー(仮題):発音を焦点化した会話教材
- 3) シャドーイング練習用教材:シャドーイング練習に使う音声教材
- 4) 世界の日本語学習者の発音
- 5) 発音チェック:会話を録音した音声ファイルを提出し、チェックを受ける機能
- 6) ディスカッションフォーラム:受講生の意見交換の場
- 7) Quiz(第 1 回～第 4 回)および Final Test(第 5 回) (戸田 2016 をもとに筆者が再構成)

これらのコンテンツを受講し、Quiz、Final Test をこなし、シラバスに定められている一定の評価基準

(60%以上)を満たすと、希望者には edX の「修了証」が発行され、「修了証」は就職活動などの際の日本語レベルの保証に利用することを推奨している。

講座開講後に行われた戸田（2018）の研究によれば、JPC の学習者行動に関するビッグデータの統計分析結果から、相互評価に積極的に参加する受講者の方が学習を継続する傾向があり、学習の質も深まっていることを明らかにした。こうしたオンライン授業の計画から実施に関する一連の実践研究は、今後の日本語のオンライン授業設計の参考になるものである。

② 筑波大学グローバル・コミュニケーション教育センター「日本語・日本事情遠隔教育拠点」

筑波大学は、日本語学習を支援する事業「日本語・日本事情遠隔教育拠点（The Center for Distance Learning of Japanese and Japanese Issues）」を、2010 年から 2024 年まで 3 期に分けて継続して推進してきた。この事業の目的は以下の 3 つである。

1. アクティブラーニングなどの多様な学習形態をサポートするコンテンツの開発
2. 知識基盤社会におけるテクノロジーを活用する教育人材の養成
3. 言語教育の広がりをつめた産学官民との連携の強化

(<https://www.intersec.tsukuba.ac.jp/~kyoten/about/>から引用)

このように、この事業は日本語教材を提供するだけでなく、日本語教育を取り巻く環境、つまり、コンテンツの開発、教育テクノロジーの活用、人材育成、産学官民の連携などを総合的に整備することが目的の事業となっている。この事業計画の中で開発され、現在、一般に提供されているコンテンツは、次のようになっている。

表 1 筑波大学の日本語・日本事情遠隔教育拠点のコンテンツ

学習コンテンツ	
つくば日本語テスト集 (TTBJ)	日本語プレースメントテスト、漢字力診断テスト
Basic Kanji Plus	日本語学習者向け漢字教科書に準拠した漢字学習アプリ
にほんごアベニュー	「話者」、「場所」、「場面」、「はたらき」の情報によって整理された発話・会話例の検索ができるコンテンツ
Nihongo123	スマートフォンや PC で日本語学習を効率的に行える学習アプリ
場面・機能別日本語会話練習データベース	自主学習用映像配信サイト
学習ツール	
SuMo Japan	ユーザー同士が質問・回答を行うことができる質問掲示型アプリ
筑波ウェブコーパス	ウェブサイトから構築された 11 億語の大規模日本語コーパス
Japanese Learner's Dictionary	日本語学習者向け辞書
リーディング・チュウ太	読解に役立つ各国語の辞書ツール、レベル判定ツールの機能
学習項目解析システム	生テキストから語彙や文法項目を抽出するウェブシステム

(<https://www.intersec.tsukuba.ac.jp/~kyoten/about/>の情報を元に筆者作成)

この筑波大学の事例は、ICT（Information and Communication Technology）を活用した日本語教育コンテンツを継続的に向上させ続けるためには、研究はもちろん、コンテンツを実行する人材の育成、産学官民の連携体制を踏まえた強固な事業計画が、継続的な教育活動の基盤となることを示唆しているといえるだろう。

③ 東京外国語大学「TUFS オープンアカデミー オンライン日本語講座」

東京外国語大学オープンアカデミーは、有料の双方向のオンライン日本語講座を一般に公開しており、日本語を学びたい人は先着順でだれでも受講することができるシステムを取っている。インターネット環境と必要なツール（Zoom、Google Classroom など）があれば、世界中どこからでも受講が可能となっているが、授業で扱うテーマの関係で、中学生以上の受講が推奨されている。

開講時期は春と秋の年 2 回で、夜間に日本語講座と教養講座の 2 つのコースが用意されており、講座毎に定員に達したら応募が締め切られる。日本語のレベルは、受講生各自が自動採点のレベルチェックテストを受け、自分で判断する仕組みだ。2023 年秋期開講の日本語講座は表 2 のようになっている。

表 2 東京外国語大学 オンライン日本語講座（2023 年秋期講座）

日本語講座名		
ライブレッスンで学ぶ日本語	対象：初級 1、初級 2、初中級 1、初中級 2、中級 1、中級 2、上級 1、上級 2	週 1 回／夜間 90 分のライブレッスン、全 15 回
オンデマンド教材で学ぶ日本語	初級 1、初級 2	オンデマンド教材を用いた自己学習（14 週）＋月 1 回／90 分のライブレッスン全 4 回
教養講座		
日本社会を学ぶ	対象：上級者向け	週 1 回／夜間 90 分のライブレッスン、全 12 回
日本語学入門		週 1 回／夜間 90 分のライブレッスン、全 6 回
日本の近現代小説を読む		週 1 回／夜間 90 分のライブレッスン、全 12 回

(https://www.tufs.ac.jp/social_international/open-academy/online-jpclass/fall.html の情報を元に筆者作成)

教科書は受講生に対して大学から郵送され、教科書以外の配布物は Google Classroom を通じて電子データで配布される。受講生に対しては、授業中の受講態度について細かい条件や禁止事項が示されており（例：ビデオはオンでマイクはミュートで受講する、発言は講師の指示に従う、授業の録音・録画は禁止、静かな環境で受講する等）、違反した場合は受講が停止されることが明記されている。

この事例は、受講対象者を国内外の一般に向けている点で特色がある。一般の人が受講しやすいように授業時間を夜間 90 分に限っていたり、オンデマンド授業であっても月 1 回のオンライン授業を行ってフィードバックを行ったりするなど、一般の人が受講しやすい環境を整えている点が参考になる事例である。

④ 東京大学グローバル教育センター日本語教育部門のオンライン日本語プログラム

東京大学では、東京大学の国際化教育の全学的プラットフォームとなる学内共同教育研究施設として、2023 年 4 月に「グローバル教育センター」が設置され、その中に日本語教育部門が置かれた。この日本

語教育部門では、東京大学に所属している留学生、外国人研究者、及びその配偶者（一部の科目）を対象に、初級から上級まで、学期にこだわらず様々な受講期間の日本語科目を開設している点、各キャンパスからの受講のしやすさを考えて日本語の授業はすべてオンラインで行われている点に特色がある。2023 年度に提供されているクラスは次のようになっている。なお、各レベルの判定は、Web 上で受講生自身がプレイスメントテストを受け、自分の判断で受講レベルを 1 つ決定する仕組みになっている。

表 3 東京大学の学内留学生対象の日本語教育プログラム

レベル	CEFR	JLPT (注 3)	一般日本語コース (総合日本語)	一般日本語コース(テーマ別)	集中日本語コース	短期日本語コース	日本語スポット講座
上級	C1	N1	レベル 5	日本文化・日本事情			上級コミュニケーション
中級後期	B2	N2	レベル 4	ビジネス日本語 / 中級・話すための日本語 II	クラス 4		日本語のあいさつと人間関係 / 中国語話者のための日本語の漢字
中級前期	B1	N3	レベル 3	中級・話すための日本語 I			日本語で話そう
初中級移行期	A2	N4	レベル pre 3		クラス 3	短期講座	日本語で話そう・聞こう
初級後期			レベル 2	漢字 II			Bridge to Level Pre3
初級前期	A1	N5	レベル 1	漢字 I	クラス 2	サバイバル	Bridge to Level 2
初学者					クラス 1	日本語 I、PLUS	漢字 First Step (非漢字圏向け)

(https://globe.u-tokyo.ac.jp/nkc/ja/program/general_course.html の情報を元に筆者作成)

⑤ 東洋大学「オンライン日本語講座 (TOYO Japanese Language Program)」

東洋大学が開講しているオンライン公開日本語講座 (TOYO Japanese Language Program) では、高いレベルのビジネス日本語力の獲得を目指したビジネス日本語のオンライン講座 (有料) を一般に公開している。日本語を学習している人であれば、国内外の学生から社会人まで、誰でも受講することができる。授業はオンラインで行われるが、講師と受講生の双方向のやりとりを重要視している。授業の後でも授業動画を閲覧することができる。

講座の受講にあたっていくつかの条件が提示されている。例えば、1 コースだけ受講したい場合でも、「TOYO Japanese Language Program」への会員登録が必要で、事前アンケートに回答しないとコースが受講できないようになっている。また、受講には Cisco Webex あるいは Zoom への登録、使用するパソコンやスマートフォンの音声機能やヘッドホンなど周辺機器の自己準備などが受講条件として求められている。また、講義時間の 80% 以上講義に参加した受講生に対して、東洋大学認定の修了証が発行されると

している。

2023 年夏季には 2 つの講座が開講されている。1 つ目は「日本語アドバンス講座」で、N1 (JLPT)、または J2 (BJT (注 4)) 以上の日本語力を持つ一般人を対象に、ビジネス場面で求められるそれぞれの言語能力領域 (ライティング、語彙と表現、BJT) に特化した学習を行う。

表 4 東洋大学 2023 夏季ビジネス日本語アドバンス講座

科目名	授業時間	内容
BJT ビジネス日本語能力テスト 対策&演習 (聴解編)	全科目全 1 回／ 平日午後 90 分	BJT に合わせ、場面認識力と場面における日本語運用力をつける 聴解練習と解説。
BJT ビジネス日本語能力テスト 対策&演習 (聴読解編)		ビジネス文書を読みながら情報を聞き取ったり、状況を把握した りする練習と解説。
上級日本語学習者の語彙学習 の困難点と対策		日本語の文字・文体・使用場面の言語的特徴から、語彙を学習す る際の困難点と対策を説明。
ビジネス日本語語彙・表現の習 得と実践		ビジネス場面で使われる語彙・表現について、問題演習と解説を 通じて理解を深める。
ビジネス文書の上級スキル		ビジネス文書を日本語で作成する際の上級スキルについて解説、 練習。
超級レベルの日本語ライティン グテスト演習		実際のビジネス場面の中の書く活動に関する演習と解説。

(<https://toyo-jlp.com/class/courselist-2023-summer-business-japanese-advanced-course> の情報を元に
筆者作成)

この東洋大学のオンラインビジネス日本語講座は、ビジネスに特化した質の高いオンライン講座を社会
のニーズに合わせて提供するという考え方や、学校法人東洋大学が 100%出資している会社 (東洋大学グ
ローバルサービス株式会社) が講座に関わる業務を行っている点など、日本語オンライン授業の効果的な
広報活動や安定した運営体制について示唆を得ることができる事例である。

⑥ 名古屋大学言語教育センター日本語教育部門「日本語オンライン教材」

名古屋大学言語教育センターは、学内共同教育研究施設として外国語教育部門と日本語教育部門の 2 部門
で構成され、2023 年 4 月 1 日に発足した。その中の日本語教育部門は、教養教育院、国際本部、人文学
研究科等の学内の関連部局と連携し、大きく 6 つの日本語プログラム及び日本語研修コースを主に対面で
実施している一方で(2023 年 9 月時点)、日本語教育部門のサイト(<http://jp.ilc.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/online/>)
には、表 5 のような自習用のオンライン教材も提供されている。

表 5 名古屋大学がオンラインで提供している日本語学習コンテンツ

名称	内容や使い方
Web CMJ (名古屋大学留学生センタ ー日本語文法オンライン学習)	日本語の初級文法の練習・復習がクイズ形式でできる自習教材。英語、フラ ンス語、ドイツ語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語、中国語、韓国語 等 18 ヶ国語翻訳付き。

Web CMJ（名古屋大学留学生センター日本語漢字オンライン学習）	日本語の初級 300 漢字の練習・復習がクイズ形式でできる自習教材。英語、フランス語、ドイツ語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語、中国語、韓国語等 18 カ国語翻訳付き。
オンライン日本語コース（名古屋大学国際言語センターの Moodle（注 5））	次のような日本語オンラインコースと教材が提供されており、履修登録をした学生がコンテンツを利用できる。 ・日本語オンラインコース（オンライン読解・作文コース、オンライン漢字コース等） 日本語教材（文法練習、科学技術語彙教材等）
名古屋大学日本語コース中級 I と II の補助教材	会話練習などの教材とその音声をダウンロードし、自習することができる。
留学生のための専門講義の日本語	2010 年に名古屋大学が作成した日本語教材『留学生のための専門講義の日本語』をオンライン化し、学外の誰でもが利用できるようにしたもの。内容は、9つの専門分野（法学・政治学、経済学、教育学、心理学、数学、物理学、工学等）の講義映像とそのスクリプト、専門講義の日本語を解説教材である。日本国内外で日本留学を目指し、日本の大学で講義を受けたいと希望している学生対象のフリー教材。

(<http://jp.ilc.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/online/index.html> の情報を元に筆者が構成)

特色としては、大学全体として、2011 年より英語で学位のとれる G30(グローバル 30)国際プログラムを提供しているが、このプログラムの学生であっても、入学後に日本語教育を受けることが必須になっている点だろう。この処置は、日常生活や将来日本で就職を希望する場合に必要とされる日本語の運用能力を留学中に伸ばすことが目的であるという。本ケースのように、英語で学位のとれるプログラムであっても、学生の生活や将来のために日本語学習の機会を提供するというオンライン日本語コンテンツの在り方は、今後のグローバル化を目指す大学の日本語教育の 1 つの方向性として参考になるであろう。

⑦ 新潟大学「オンライン特別日本語プログラム」

新潟大学のオンライン特別日本語プログラムは、来日せずに自分の国で日本語を遠隔学習するもので、新潟大学と「学生交流協定」を締結している海外の大学の学部・大学院に在籍している正規学生に対象を特化したプログラムとなっている。毎年秋学期（2023 年 10 月～2024 年 2 月）にだけ行われており、協定校の受講希望者は 8 月初旬までに、個人ではなく所属大学を通じて新潟大学に申請を行い、選考結果が出るまで 1 ヶ月を有する。

授業は週 3 回（月・水・金）行われ、合格者には 3 単位が与えられる。受講生には、実際に来日する交換留学生と同じ「新潟大学特別聴講学生」の身分が付与され、成績についても、一般の交換留学生と同じように、各コースのシラバスに基づいて成績の評価が行われ、合格した場合には、プログラム終了後に成績証明書が発行される。

コースは「グリーン（JLPT の N4 レベルに合格できるレベル）」、「シルバー（N2 レベルを目指すレベル）」、「ゴールド（JN1 レベルを目指すレベル）」の 3 種類がある（表 6 参照）。それぞれのコースの定員は 30 名、日本語レベルについては、プレイスメントテストも JLPT の証明書の提出も不要で、各自が日本語能力試験（JLPT）のホームページを参照し、科目の受講条件や日本語レベルを確認し、受講するコ

ースを自分で選択することになっている。

表 6 新潟大学の大学間協定校用オンライン日本語コース

コース名	内容	日本語レベル	授業回数
ゴールド	日本語の 4 技能を総合的に学習する（読解・聴解・作文・発話）	N1 を目指すレベル	1 回 90 分授業
シルバー		N2 を目指すレベル	週 3 回
グリーン		N4 に合格できるレベル	計約 45 回

講義は Zoom を通じてライブで行われるため、安定したネット環境とオーディオ機能が付属した PC、ノートパソコン、タブレットがあることが受講条件となっている。オンデマンドや後日のビデオ配信もないため、講義を決める際には、海外からの受講の際には時差なども十分に考慮に入れることという注意がされている。教材は授業開始後に指定され、その指示に従って注文し、購入する。

新潟大学の協定校の留学前の学生を対象とした日本語コースは、パンデミック時のように留学が制限されるような場面に特に有効であり、また、通常の協定校との関係づくりにも役立つ点で、参考になる事例である。

2. 2 既存のオンライン授業が示している留意点

2. 1 で概観した既存の大学のオンライン及びオンデマンド授業（プログラム、コース、コンテンツ等）の設計上の留意点は、大きく次の 4 点に集約できると考えられる。

① オンラインに特化した授業内容と教材の開発

今回概観した事例は全て、対面授業と異なる観点で、オンライン授業に適した授業内容と教材の開発を行っていた。さらに、開発した教材の配布方法や視聴方法も、MOOCs や Moodle などの既存の教育向けプラットフォームを利用するか、あるいは自前の HP からのダウンロードを促すか、それぞれのプログラムの受講対象者に応じて選択されていることがわかった。プレイスメントテストに関しては、学習者の自律性を尊重し、自己判断でレベルを決定させているケースが多かった。

② アクティブラーニング（注 6）実現への工夫

一方的に説明を行うような日本語オンライン授業は予想外に少なく、アクティブラーニングを実現しようとする工夫が各プログラムで見られた。アクティブラーニングの実現には、双方向の良好な通信環境も必要のため、受講条件として、安定したインターネット環境や PC やイヤホンなどのツールの確保を強調している先行事例が多く見られた。

③ 評価やフィードバックの方法の顕在化

単位の出るオンライン授業は特に適切な評価が行われる必要があるので、申し込みの段階から、HP などに評価方法が明確に示されていた。単位の出ない講座については、修了証や参加証を提供するなど、受講の価値を保証する工夫が見られた。また、オンデマンド講座では途中でオンラインの時間を設けて学習へのフィードバックを行うケースがあった。

④ トラブルシューティングのプロセスの確保

先行事例では、インターネットで授業を受けている中で起きた困難点や問題点への対応をどのように行うか、つまりトラブルシューティングのプロセスを受講生に示していた。例えば、トラブルの際の連絡先や、よくある質問と回答を掲載するなど、対面とはまた違ったトラブルへの配慮が必要であることがわかった。

2. 3 本学の日本語オンライン授業の可能性

以上、他大学の先行事例を踏まえると、本学の日本語オンライン授業の可能性は次の 2 つの方向性があると考ええる。

1) 海外協定校に限定したオンライン及びオンデマンドの日本語講座の提供

今回概観した事例の中で、新潟大学の「オンライン特別日本語プログラム」は、新潟大学と「学生交流協定」を締結している海外の大学の学部・大学院に在籍している正規学生を対象として開講している点で、海外協定校が 216 校あり（2023 年度）、多くの交換留学生を受け入れている本学のニーズに近く、日本に留学を希望している潜在的留学生の要望に近いのではないかと考えられる。例えば、日本での留学生生活を想定した会話練習や、大学の講義を聞く聴解練習など、留学準備としての日本語学習の提供は、一般的に教育的な意義があるとともに、日本留学への意欲そのものを高める効果が期待できる。講座案として、次のような講座設置の可能性があるだろう。

例)「日本留学への第一歩！基礎から学ぶ日本語コース」

「日本での生活をマスター！実践日本語講座」

「キャンパスライフに役立つ日本語会話」

「日本文化を楽しむための日本語入門」

2) 自習用のオンライン日本語学習コンテンツの提供

本稿における自律学習とは、日本語学習を自律的に行うのみならず、日本語学習者の自律性（Learner Autonomy）を育てることも意味している。心理学者のヴィゴツキー（Vygotsky, L.S.）は、人間の精神機能は社会的相互作用から内面化されると主張した（ヴィゴツキー 2005）。ヴィゴツキーは、例えば、小さな子どもが学ぶのは、自発的な発達の結果ではなく、他者との相互作用の経験からであると主張したが、そのような自律学習の観点に立つと、オンライン授業で日本語力を伸ばすためには、日本語を提示するだけでなく、日本語の学び方や学ぶ機会の提供も必要だということになる。その点、グローバル MOOCs の「Japanese Pronunciation for Communication」は相互評価などの機会を、東洋大学のビジネス日本語講座も双方向の学習時間の提供を重視しており、一方的でなく双方向を意識した自習用のオンライン日本語学習コンテンツの提供は、学内外の留学生の学びを促進することが期待できると考えられる。次のような学習コンテンツが考えられるだろう。

例)「毎日の日本語：文化と言葉を同時に学ぶ自習プログラム」

「日本語 聞いて話して：日本語リスニングとスピーキングの自習コース」

「日本語文法 超基本：毎日 15 分の自習ガイド」

「読んで楽しむ！日本語リーディングプログラム」

「日本語単語チャレンジ：毎日少しずつ語彙力アップ！」

3. 日本語オンライン授業の開発までの経緯

今回、オンライン授業の開発について言及する前に、本学で継続して開発を行っていたプレイスメントテストについて言及したいと考える。こちらの研究に関しては、コロナ禍以前からプレイスメントテストをオンライン化すべく取り組んでおり、ここではまずその経緯について整理したいと思う。また、この研究は、現在の研究の前身ともいえるべき研究であり、オンラインで学習者が気軽に受験することを可能にした。これから行うオンライン授業のプラットフォームを選ぶ際にも、このプレイスメントテストのプラットフォームをどのように決めたのかを踏まえて決めていきたいと考える。

それまで紙媒体で行っていたプレイスメントテストをオンラインに移行することにより、(1)印刷に要する手間と経費の削減、プロクター、マークシートなどのチェックなどにかかる人件費(2)遅れてきた学習者など全ての留学生のニーズに対応が可能となり(3)受験者の選択した時間にどこからでも受験が可能になる、という3つの利点を鑑み行うことになった。経緯については、原、尾本、高木、村上の「JIU 日本語オンライン・プレイスメントテストの開発(2020年3月)」に詳しく記したが、プラットフォームとして、使いやすく、安価で、アクセスなどに問題がないものを選択することにした。その際、北米でよく使われている sakai (<https://www.sakailms.org/>) や XOOPS (<https://xoops.org/>) などとも考慮したが、オープンソースでかつ信頼性が高いということもあり、moodle での実装となった。また一部 sakai や Google フォームでも実装を行なった。

基本的にこの状態で問題はなかったのだが、コロナ禍となり、問題が生じた。これについては、詳しく高木・尾本(2023)にも記載したが、今まで来日してから日本国内でオンラインのプレイスメントテストを受けていたため問題がなかったのだが、中国の学生が来日せずにオンラインで授業を取るとなった際に、一部の学習者が moodle のサイトにアクセスできないという問題が起こった。これは、バックアップとしていた Google フォームも同様に問題があったため、当時大学がオンライン教育のために導入した LMS に乗り換えることにした。大学の LMS へのアクセスに問題がないことがわかっていたため、学習者の manaba へのアクセス自体は問題がなかった。しかし、それまで使えていた機能の一部が使えなくなったことは痛手であった。特に、このプレイスメントテストに関しては、1つのテストを受けて判定するというものではなく、学習者は、5つのテストを連続して受けることになっていることがネックになった。この基礎、初級、初中級、中級、中上級、上級の6レベルの判定が可能になっている。学習者は、それぞれのレベルを受けて、自分のレベル以上のテストであると感じた時に試験を終わらせるような仕様となっている。学習者は、いつでも自分の好きな時間に始められるが、その際、テキストや参考書を読んだり、友人と相談することができないように、それぞれのテストには制限時間をかけていた。それが、manaba では出来なかったため、決まった日の決まった時間に試験を行い受けられなかった学習者は、追試験の形で試験を受けるという形式にならざるを得なかった。ただ、2022年にクォーター制度に移行したことを受けて manaba が廃止されたため、国外にいる学習者でもアクセスしやすく、さらに時間制限を設定できる MS フォームを使用することとした。こちらを現在使用しているが、特に問題はない。ただ、日本語オンライン授業のコースを海外へ発信するとなれば、それに適したプラットフォームが必要となってくる。語学教育センターなり留学生別科が窓口になり、海外姉妹校へのサービスとして、無償でさわりの部分をオンラインで提供するのには、現在のフォーマットでも大きな問題がないと考えるが、単位が認定されるにせよされないにせよ、より系統だったコースを提供するとなると、きちんとプラットフォームを選定する必要があると感じる。

4. 日本語オンライン授業のためのプラットフォームの選定

現在、日本語オンライン授業で提供するコースに関しては3本の柱を中心に考えている。1つは、日本語のオンライン授業の提供であり、姉妹校や将来的にこちらに留学生を派遣してくれそうな教育機関へのお試しとしての授業の提供である。最終的には、こちらを基礎、初級などのコースとしてパッケージ提供ができる形にしたいと考えている。そして、次に日本文化についての入門コースである。こちら、現代日本文化、伝統日本文化、日本の地理、歴史、社会のようなコースに育て上げたいと考えている。最後に、日本語教授法についてのコースの構築である。日本語教師が国家資格になるにあたり、ウェブで気軽に学習できるようなコースを考えている。こちらは、前の2本の柱とは違い日本国内向けのコースを考えている。この3つのコースはいずれも日本語、日本文化を最初に構築し、最後に日本語教授法についてのコースの実装を予定している。

このようなオンラインコースを作成するためにいくつか方法が考えられる。1つはまずポータルサイトを構築し、そこにユーザーを誘導して、学習を進めていってもらう方法である。この方法であれば、様々な異なったプラットフォームの要素をサイトとして集めることで運用していくことが可能になる。例えば、動画サイトは youtube を利用し、それと例えば、問題を組み合わせて簡単な動画を利用した問題作成が可能になる edpuzzle (<https://edpuzzle.com/>) を運用し、簡単な練習問題などは、MS フォームなどを用いるというような方法である。ただ、これが単に教育目的で、基本的に無償で提供され続けるのであるならともかく、有償を考えるようになった場合の運用は、ハードルが上がると考えられる。このプロジェクトの初期段階は、ポータルサイトで運営し軌道に乗った段階で、運用の仕方を変えることを考えている。

将来的に、ここでのサービスを有償にすることも視野に入れ、次のプラットフォームの選択を考えている。現在、(1) ウェブサーバーをレンタルし、オープンソースの LMS を走らせる、(2) 既に確立されているオンライン学習プラットフォームを使用する。という2点が候補にあがってきた。

(1) の方式をとる場合の LMS には、拡張性があり、モジュール追加で機能が追加できるような moodle や XOOPS のようなものが好ましいと考えられる。今回候補に挙げているのは、前回も使用した moodle と XOOPS、そして Joomla! (<https://www.joomla.org/>)、Drupal (<https://www.drupal.org/>) である。レンタルサーバーも最初は、小規模で初めて、後から独立サーバープランなどに移行できるものを使用することが考えられる。この方法の良いところは、出費を最低限で抑えられるという点にある。出費はサーバーのみで、しかもトラフィックを見て、プランを調整していけば、運用は比較的簡単であると考えられる。悪い点としては、このプランでは、何か問題が起こった時に自分たちで対処しなくてはならなくなるところであろう。サーバー自体のトラブルなら運営が対応してくれるだろうが、インストールした、プログラムから起こる不具合については、こちらの責任となる。また、日本語化についても完全に達成できていない場合もあるため、注意が必要である。さらには、追加モジュールがそれぞれのビルド(版)によって動いたり動かなかったりする可能性があるということが問題である。さらには、ビルドを更新したことでそれまで動いていたモジュールが動かなくなったり不具合が出ても全て自己責任となってしまう。

(2) の方式に関しては、きちんとした運営がいるために、こちらでサーバーの管理などをする必要がない点にある。こちらで用意するコンテンツ以外の管理や、そこに存在するプログラム、さらにはスマホやタブレットなどの端末に最適化するようなサービスも全て向こうが提供してくれる。全てがパッケージ化されているため追加の補助ツールなどの必要がないというのもいい点であると考えられる。ただ、反対にこれだけのサービスが全て代金として降りかかって来るために、高額な出費を余儀無くされると考える。そこで、既にオンライン学習プラットフォームが確立している海外にも視野を広げ検討をしているところ

である。現在、無料で開設できしかも有料のプラン変更にも可能で、比較的日本語化しやすい teach:able (<https://teachable.com/>) と thinkfic (<https://www.thinkific.com/>) を考えている。ユーデミーに関しては、日本語化という点と、広報ツールが優秀であるために、検討したが、商業的な色合いが強く、また料金体系についても前にあげたサービスと比較して断念した。

現在は、(1) と (2) のどちらも使いサイトを構築し、運用した上でよりよい方法を決めたいと考えている。

5. オンライン教材の試作

5. 1 文化に関するコンテンツ案

全体構想として、日本の文化や社会に興味を持ち、日本留学の意思につながるようなオンライン教材を提供したいと考えているため、言語だけでなく、日本文化に関してのオンデマンド教材コンテンツの開発にも着手している。

今回は、現代日本文化、そして日本の歴史と文学の2つのコースを考えている。この2つのコースは、英語で提供されるオンデマンドコースになる。まずは、簡単な講義を pdf とビデオ教材で学び、内容確認問題を学習者がすることで内容把握ができているか振り返るという形式で進んでいく。1 ユニットで大体 1、2 時間程度でカバーできる内容として考えており、1 つのコースで、全部で 7 回程度を想定している。想定としては、7 週間程度で終わるコースを想定している。このオンデマンドのクラスは、単位認定されるクラスではなく、修了書を交付することを考えている。1 コースを 7 回にしたのは、今回本学のクォーターシステムに合致しており、また、次のコースと合わせることで、1 セメスター分の学習量も担保できると考えたからである。

今回、日本の現代文化を取り上げた理由は、主に 3 点あげられる。(1) 学習者に日本語学習の入り口としての日本の現代文化、特にアニメ、漫画、音楽、ゲームなどのコンテンツに関してその歴史的、経済的な背景について学びそこから日本語学習や日本文化学習に繋げてほしい。(2) オンデマンド型教育に文化を学ぶというコンテンツは適合性が高いというメリットがある。(3) 日本に留学した際に、オンデマンドで学習した知識が活用できる。以上の 3 点から学習者にも大きなメリットがあると想定した。前半部分の現代文化のパートでは、アニメや漫画に出てくる日本の食文化、学生の生活、日本の住居についてもカバーするために、日本に来た際に、大きな戸惑いなく生活拠点の移動ができ、日本文化についても学習できると想定している。このクラスは、単に、アニメや漫画などに関して学ぶのではなく、その歴史的、社会的な意義を考え、さらにアニメや漫画の手法が、どのように成立し、例えば、日本の文学とどのような関係性があるかを浮き彫りにする。また、現代日本文化から、次の日本の歴史、文学のクラスに繋ぐための橋渡しの役割も果たすと考えている。

日本の歴史、文学については、学部入学後の授業参加を意識し、日本文学を基本的な日本の歴史とともに学ぶ内容を検討している。簡単な歴史的な背景とともに文学作品について学ぶという形式をとり、王朝文学、歴史物語などがどうして成立したかなど、その時代背景とともに代表的な文学作品を解説していくという形式をとりたいと考える。全 7 回のコースをとることで大体の簡単な日本の文学の流れと日本の歴史が学べるコースとなっている。

このコースの開発に関しては現在試作を行なっている第 1 回分を含めて 2024 年度に実装、2025 年度には、まずはパイロットスタディとして、希望する海外提携校などと話し合い小規模に試行し、問題ないようであれば、希望する教育機関に公開できればと考えている。

5. 2 コミュニケーションに関するコンテンツ案

コミュニケーションのコースにおいては、初級日本語と上級レベルの日本語コース設定を想定している。

初級レベルのコースは、日本語留学をリアルにイメージさせることを目的に、飛行機を降りてから大学を訪問し、教員や同級生に会うまでの場面をストーリー仕立てにし、それらの場面で想定される日本語のコミュニケーションを PDF とビデオ教材で学び、さらにオンラインを通した練習課題を通して自分のペースで日本語の基礎的なコミュニケーションを学習、習得していくというスタイルを想定している。全部で 7 回程度を予定しており、基本の挨拶・自己紹介、交通機関、大学初日、学食や買い物、寮生活、問題解決などの場面設定を予定している。

また、上級レベルのコミュニケーションでは、日本の大学の授業参加を想定し、日本の社会、文化、科学技術についてのニュースや専門的な文章で良く使われる語彙や表現を学習していく予定である。こちらも 7 回程度の内容を想定しており、例えば、日本の少子高齢化社会、老老介護、ヤングケアラーなどの社会問題から、日本が持つ文化コンテンツについてや科学技術の展望などについてカバーする予定である。

6. 今後の課題

今回のプロジェクトで作成したコンテンツをどのように提供していくかが今度の課題となってくると考えられる。2023 年度は、どのようなコンテンツをどのように実装するかを研究してきた。2024 年度は、実際にコンテンツを作成して監修を行い、さらに 2025 年度にはそれらのコンテンツのパイロットスタディを行い、実装に見合う形に修正しながら完成を目指す予定である。

【注】

1. 本学では、2020 年度は 4 月 27 日から 5 月 2 日までが新入生の履修登録期間となり、5 月 11 日から春学期の授業が開始された。
2. 「MOOCs」とは、Massive Open Online Courses の略で、インターネットを通じた教育サービスの総称で、「edX」はその 1 つで、世界中の大学や企業が無償で提供している授業や講座を受けることができる。
3. 「JLPT」とは、国際交流基金と日本国際教育支援協会が主催している「日本語能力試験」のこと。
4. 「BJT」とは、公益財団法人日本漢字能力検定協会が主催している「BJT ビジネス日本語能力テスト」のこと。
5. 「Moodle」とは、e ラーニングを支援する学習管理システム（LMS）で、オープンソースのため、無償で利用できる。120 以上の言語に対応しており、レポート機能、学習の進捗確認機能など、学習をサポートするいろいろな機能を利用することができるため、対面授業・実技授業・オンライン授業などに広く対応できるツールである。
6. 「アクティブラーニング」とは、学習者が能動的に考え、学習する学びの形態である。具体的には、学習者同士のディスカッション、グループワークなどの学習活動が推奨される。

【参考文献】

- ヴィゴツキー（2005）『文化的・歴史的 精神発達の理論』学文社
- 戸田貴子・大久保雅子・サイ・ティ・マイ（2016）「MOOCs(Massive Open Online Courses)による日本語発音講座の開発プロセス」早稲田大学日本語教育学会 2016 年秋季大会予稿集

『JIU 日本語教育実践報告集』 5号 2024 年 3 月

戸田貴子 (2017) 「ICT を利用した外国語教育-グローバル MOOCs における日本語音声教育を例として-」

『公共日本語教育学 -社会をつくる日本語教育』 くろしお出版

戸田貴子 (2018) 「グローバル MOOCs の相互評価における継続参加 -日本語発音オンライン講座の分析を通して-」 『日本語教育』 170, pp.32-46, 日本語教育学会

筑波大学グローバル・コミュニケーション教育センター「日本語・日本事情遠隔教育拠点」

<https://www.intersec.tsukuba.ac.jp/~kyoten/about/> (最終閲覧日 2023 年 9 月 19 日)

高木美嘉、尾本康裕 (2023) 「日本語オンラインテストの評価と教育効果の可視化」 私情協教育イノベーション大会予稿集

東京大学グローバル教育センター 日本語教育部門 (日本語センター)

<https://globe.u-tokyo.ac.jp/nkc/ja/index.html> (最終閲覧日 2023 年 9 月 19 日)

東京外国語大学「TUFUS オープンアカデミー オンライン日本語講座」

https://www.tufts.ac.jp/social_international/open-academy/online-jpclass/ (最終閲覧日 2023 年 9 月 19 日)

原やす江、尾本康裕、高木美嘉、村上佳恵 (2020) 「JIU 日本語オンライン・プレイスメントテストの開発」 城西国際大学紀要第 28 巻第 2 号

東洋大学 TOYO Japanese Language Program

<https://toyo-jlp.com/> (最終閲覧日 2023 年 9 月 19 日)

名古屋大学言語教育センター日本語教育部門

<http://jp.ilc.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/> (最終閲覧日 2023 年 9 月 19 日)

MOOC.org (edX)

<https://www.mooc.org/> <https://www.edx.org/> (最終閲覧日 2023 年 9 月 19 日)

Moodle

<https://moodle.org/?lang=ja> (最終閲覧日 2023 年 9 月 19 日)

(おもと やすひろ・たかぎ みよし・城西国際大学 語学教育センター)

日本語能力に差があるクラスでのプロジェクト学習の試み
—受講生の振り返りから—

佐藤 明子

A Tentative Plan for Project Based Learning with Different Levels of Japanese Language
Ability: -Based Upon Student Reflection-

Akiko Sato

【要旨】

2023年度F2クォーターに担当した「Japanese Project Education A」クラスは2つのプロジェクト学習を進めた。本稿ではその試みや工夫を紹介する。そして、その効果について、受講者が振り返りシートに記述した内容をもとに報告する。受講者の日本語能力に大きな差があることで、受講者同士の学びを抑制するのではないかと思われたが、このプロジェクト学習が日本語のレベルによらず、受講生たちが楽しく協働し、学びにつながることが分かった。しかし、レベル差のあるクラスでいかに効果的な日本語学習につなげていくかに課題が残った。

Abstract

Two project studies were practiced in this class in the F2 quarter of 2023. It was thought that that the large difference in participants' Japanese language abilities might prevent them from learning from each other. Contrary to expectations, this kind of project learning led to enjoyable collaboration and learning among the participants, regardless of their Japanese language level. Issues remain, however, concerning how to link this activity with Japanese language learning effectively.

キーワード：成果発表型、日本語能力にレベル差がある授業、個人プロジェクト、グループプロジェクト、振り返りシート

1. はじめに

「Japanese Project Education A」は、英語話者を対象としたクラスで、日本語レベルによらず受講できる。クラス内では英語と日本が媒介語として使用されている。授業内容は様々な課題を通して日本語を獲得していくことで、その内容の詳細は担当者に一任されているため、比較的自由に、そして柔軟に行われる。筆者は2023年度F2クォーターで初めて担当することになった。担当するにあたり、前任者に話を聞いたところ、授業運営をしていくうえで、2点課題があったことがわかった。1)日本語レベルに差があることで、クラス活動と発表の際、受講者に負担が多かったこと、2)どの受講者にも合うトピック選びが大変であったことである。1)については、受講者は初級から上級まで幅広いレベルの学生たちがいるため、教員は上級者に対してはプレゼンテーションをする際、初級者にもわかるように平易な日本語を使って発表することを、初級者には自動翻訳は使わずに習ったもので表現するように伝えた。しかし、上級者は初級者に合わせた日本語を使うことで、自身の日本語レベルが十分に発揮できないことに不満を持ち、日本

語での発表を控え、しかたなく英語での発表に切り替える者もいたという。一方、初級者は日本語レベルと第一言語との差が大きいことや上級者の上手な日本語から刺激を受け、そのもどかしさから自動翻訳に頼ることがあったという。その結果、自身でも理解が浅い日本語文を読み上げたり、上級者が話す日本語がわからずに戸惑うなど、双方にとって、不本意な結果になったとのことだった。2)については、主教材クラス（総合教科書を使って学ぶクラス）と内容が重ならず、その上でレベルによる差が出にくい話題を選択することに苦慮したとのことだった。

多様な日本語レベルの学生が混在するクラスで、どのように学びにつなげるか、前任者からの課題をもとに、今クォーターでは 2 つのプロジェクトを進行することにした。各受講者が個人で行う「わたしの日本語プロジェクト」と教員によって大テーマを設定したグループプロジェクトである。ここでは、2 つの活動での試みについて述べ、受講者の振り返りから次年度への課題を探ることを目的とする。

2. 授業概要と流れ

2. 1 受講生

2023 年 F2 クォーターに筆者が担当した「Japanese Education A」は Beginner レベルから Advanced レベルの学生 15 名が履修している。受講生についての詳細は表 1 に示す。

表 1 受講生について

日本語レベル	出身国	人数	総合日本語クラスでの主教材
Advanced	ノルウェー	1 名	まるごと B2
	ハンガリー	3 名	
	ポーランド	1 名	
Upper-intermediate	スペイン	1 名	Intermediate Japanese
	スロバキア	2 名	
	ノルウェー	1 名	
Intermediate	リトアニア	1 名	GENKI Book2 Intermediate Japanese
	カナダ	1 名	
	スペイン	2 名	
Beginner	カナダ	1 名	GENKI Book2
	フィンランド	1 名	

本学では、学生たちの日本語レベルをプレイスメントテストと日本語既習歴によって分けている。プレイスメントテストの結果で割り振られたクラスに参加し、必要であればクラス移動を行ったうえで最適なクラスを履修することになる。Japanese Education A では 15 名、4 レベルの学生が履修した。Beginner レベルの学生は F1 クォーター（9 月授業開始）から来日した学生で、うち 1 名は来日後、日本語をゼロから始めた学生である。当該クラスを履修するころには、来日から 2 か月ほど経ち、総合日本語クラスでは『GENKI Book 1』の Chapter5 まで修了している。Advanced レベルにいる学生は出身校によって異なるが、1 年半から 3 年ほどの日本語学習歴があり、N3 から N2 相当レベルに達している。また、日本語を学習する目的や態度も多様で、帰国後に日本語関連の研究をするため、大学院への進学を希望している

学生、将来は日本での就職を考えている学生、帰国後は日本語の学習を継続しない学生など様々である。いずれの学生も本校の英語で開講されている授業を受講しているため、英語力には不安がない。これらの学生の共通点は日本に興味があり、現在日本で生活していることである。

2. 2 授業計画

クラス全体では「自分たちの興味があるテーマについて、計画を立て活動し、まとめる」ことを目的とし、受講生たちは各回クラスで活動に必要な日本語を学習することを日本語の目標とした。クラスは週 2 コマ (105 分 x2 回) 全 14 回である。曜日ごとに活動を分けて、個人プロジェクトとグループプロジェクトを実施する。まず、学生自身がクラス活動を決めて実施する「わたしの日本語プロジェクト」と教員によって大テーマを設定したグループプロジェクトで、7 回ずつ実施した。いずれの曜日も最終クラス (7 回目) でまとめの活動を行った。初回のオリエンテーションで、曜日によって活動が違うこと、この活動の目的について十分説明した。全体の授業計画の詳細は表 2 のとおりである。

表 2 授業計画

授業回	授業計画	授業内/外活動
1 回	・ イントロダクション ・ 目標設定 ・ 活動計画	・ 課題整理 ・ 目標設定、活動計画シート記入
2 回	・ 目標に向けた活動 個人プロジェクトの共通課題	・ 課題の調整
3 回		・ 成果物
4 回		・ プロジェクトの過程の進捗報告
5 回		・ 振り返り
6 回		・ 個人プロジェクトの事前課題
7 回	・ 発表 ・ 活動まとめ	・ 振り返り発表

2. 2. 1 個人プロジェクト「わたしの日本語プロジェクト」の概要と流れ

毎週火曜日に実施した個人プロジェクトでは、2 つの活動を通して、日本語力の向上を目指した。1 つ目の活動は、F2 期間で達成したい自身の日本語の目標を決め、その目標に向けて必要なことは何か、最終日 (目標) から逆算して計画を立てていく。毎回、授業終了後には活動計画シートに達成度と振り返りのコメントを記入し、教室で提出をする。振り返りシートとは別に教室内の活動の成果物は LMS (Universal Passport) に提出することにし、教員は LMS を通してフィードバックをした。最終クラスでは、その活動を通して自身の日本語について振り返りを行った。

また、この時間の活動目標を設定するにあたり、初回クラスで日本語について得意なこと、苦手なこと、興味があること、F2 クォーター修了時にはどうなっていたいか、クラスメートと話し合った。話し合いの際に使用する言語は自由とし、お互いに安心のできる言語で話すことにした。その後、情報を共有し、より具体的な個人の目標を設定していった。

2 つ目はクラスの事前活動として、毎週本を一冊読むか、ニュースを一つ聞いて要約するという課題を

与え、その内容について教員に話す活動を行った。ニュースは「News Web EASY」(注 1)、本はオンラインで楽しめる「日本語多読道場」(注 1)を紹介し、学生には自身の興味とレベルにあったものを選択するように伝えた。まず、教室に来たら、くじ引きで順番を決め、自分の番になったら、別教室に移動する。そして、事前課題の内容について 30～60 秒程度にまとめて発表する。教員は内容質問や内容に対する学生の考えについて 2、3 質問する 5 分ほどの活動である。この活動の後に、その場で日本語や発表の仕方に関するフィードバックをした。

2. 2. 2 個人プロジェクト「わたしの日本語プロジェクト」学生の目標

活動計画シートとアンケートに協力してくれた 11 名の振り返りから、学生の目標を表 3 に示す。学生の設定した目標は単語や漢字の練習、本やマンガの翻訳が中心で日本語のレベルによる違いは見られない。学生たちにとって興味のある内容や自身の必要性に応じて課題を選んでいることがわかる。

表 3 個人プロジェクトの目標 (原文ママ)

学生	日本語レベル	個人プロジェクトの目標
学生1	Advanced	To increase my vocabulary as much as possible, because that is what I think is the most important for me to do to be able to engage in more conversations more fluently.
学生3	Advanced	単語シートを作ったり、本を読んだりしたかったと思います。
学生5	Advanced	My goal was to improve my reading skills and learn new vocabulary. I was also glad to have a speaking practice with Sato-sensei.
学生10	Advanced	Translate a book about Sakai, Osaka I bought during my trip.
学生2	Upper-intermediate	Translate Shingeki no Kyojin manga's 2-3 pages for every class.
学生4	Upper-intermediate	To learn kanji from the Anki decks I downloaded. Specifically, the first 5 lessons.
学生6	Upper-intermediate	being able to translate an easy book in Japanese.
学生7	Upper-intermediate	To translate 2-3 pages of "Attack on Titan" Manga (every Tuesday). Also make a list of all the new words/ kanji I saw while translating, and trying to make flash cards with these words to practice them.
学生8	Upper-intermediate	日本語能力試験のN3のレベルぐらいまで漢字を覚えるようになりたかったです。
学生11	Intermedite	Pass class and 日本語をならいます。本/マンガ/はなしをよむ。みじかいほんやくをします。Maybe日本のおんがくのかしをべんきょう
学生9	Beginner	My goal was to focus on memorizing vocabulary from Genki chapters and understanding grammar rules.

2. 2. 3 グループプロジェクト「先輩から後輩へのメッセージ」の概要と流れ

毎週木曜日に実施したグループプロジェクトの大テーマは、受講者を先輩と見立て、これから日本に留

学する学生たち（＝後輩）に日本で暮らす助言やヒントを教えようというものである。その成果発表と配布する発表資料の作成を最終課題とした。学生たちは大テーマについて話し合いを重ね、興味が近いクラスメイトとグループを作る。そのため、グループ内の日本語レベルには差が大きいところもある。活動や発表で使用する言語は、日本語、または英語のいずれか自由に選択できるようにした。ただし、最終発表を日本語でする場合は配布資料（レジュメ）は英語でまとめ、反対に英語で発表する場合は日本語で配布資料（レジュメ）を作成するように指示した。なお、グループ発表であっても、発表の言語選択は個人で決めていいことにした。

初回クラスで、グループプロジェクトの内容と目的について説明した。それから、小テーマを決定するにあたり、ブレインストーミングを行った。3人ほどのグループに分かれ、日本の生活の良い点、大変な点、困難があった場合、どのように対処したかを話し合い、ポストイットに貼ってまとめた（図1）。それから、まとめた情報をほかのグループに共有することで、考えを整理した。

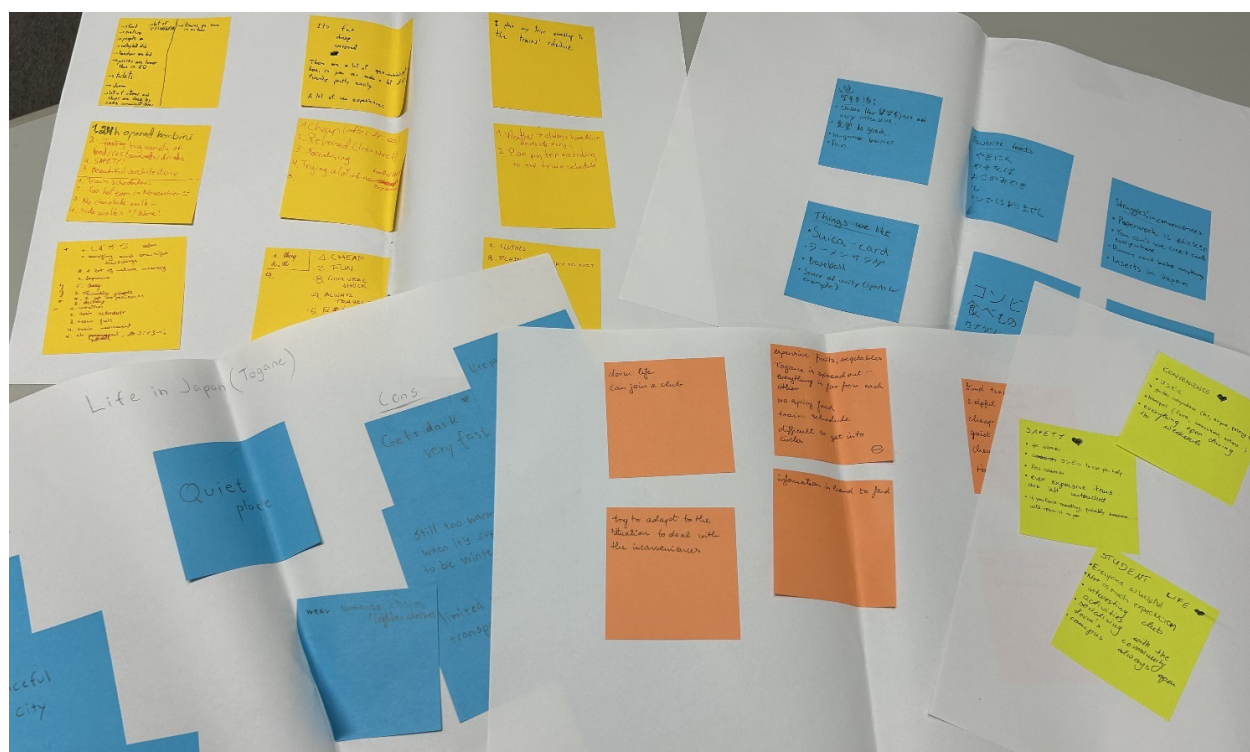


図1 学生による日本の生活についてのブレインストーミング

その後、整理した案をカテゴリー化し、クラス全体で共有した。受講者たちは興味のあるカテゴリーに分かれて、グループを作った。グループ内でさらに話し合いを続け、小テーマを決定した。活動計画シートには小テーマと各回の活動と予定、発表方法を記入した。各回の授業終了時には、活動計画シートに達成度を記入し、教室で提出した。成果物は各グループの代表者が LMS (Universal Passport) に提出することにした。なお、最終クラスでは、プレゼンテーション活動をしたあと、全体の振り返りを行った。

フィードバックは、各回の提出物と活動計画シートの振り返りにコメントを書き、次の時間に返却した。その際、進捗や活動内容が特定の学生に偏っていないかの確認をしたり、必要に応じて日本語の指導をしたりした。

2. 2. 4 グループプロジェクトの小テーマ

これから来る後輩たちに何を教えてあげたいか、ブレインストーミングの結果を分類したところ、食べ物、遊ぶところ、旅行、ストレス、異文化の違い、人との出会いなど案が出た。そこから関心のあるカテゴリーごとに集まり、そのメンバーとグループになって、テーマを深めていった。その結果、5つのグループに分かれた。表4に各グループの小テーマとその内容を示す。

表4 グループのテーマと日本語レベル（原文ママ）

グループ	グループ小テーマ	テーマの内容	日本語レベル	発表予定の言語
1	東金のおいしいレストラン	we are going to visit restaurants in Togane and rate them by price, atmosphere and taste, order, vegan options?	Advanced	日本語
			Upper-intermediate	日本語
			Beginner	英語
2	Intercultural differences	うちとそと、たてまえとほんね、あいづち	Advanced	英語
			Upper-intermediate	英語
			Intermediate	英語
3	Our recommended things to do as a JIU student	Recommendation on various things and activities as a JIU student. Categories: shopping, entertainment, landmarks, おすすめ restaurant	Advanced	英語
			Upper-intermediate	英語
			Upper-intermediate	英語
			Intermediate	英語
4	Travel tips	安い旅行方法、東金からいろいろな有名などころまで行く方法	Advanced	英語
			Advanced	英語
			Beginner	英語
5	Ways to relax in Japan	places to relax (what to do there) onsen, ryokans, spa, karaoke, visiting shrines/temples	Upper-intermediate	日本語
			Intermediate	日本語

グループ1は食に興味があるメンバーが集まった。東金市(大学付近)のおすすめのレストランを探し、メニューや値段、雰囲気やサービスなどを評価しつつ、紹介することにした。また、メンバーにはベジタリアンがおり、日本で食に困った経験からベジタリアンメニューの有無なども紹介することにした。グループ2は日本の学生や教員が留学生の日本語に対して本音で話していないのではないかと戸惑った経験から、城西国際大学に在学している留学生と日本の学生にアンケート調査をすることにした。留学生に同様な経験がないか、日本の学生に対しては留学生の日本語についてどう思っているのか調査し、その結果を発表することにした。グループ3は留学中の勉強を大変だと感じるメンバーが多くおり、勉強以外の時間を充実させるために、大学近辺にある息抜きができるお店やイベントなどを紹介することにした。グループ4は旅行好きのメンバーが集まり、お金がない学生でも楽しめる場所や旅行の長さに合わせたおすすめの旅行先、その行き方について紹介することにした。グループ5は宿題や課題の多さに圧倒された経験から、心と体を癒す場所やお店を調査し、紹介することにした。どのグループも自分たちの経験から、より充実した留学生活を送るためのヒントを目標として設定することができた。

3. 授業方法に対する学生たちの振り返り

授業を履修した15名を対象に、学期末の振り返りアンケート(紙面、またはMicrosoft forms)を実施した。そのうち、アンケート調査協力者は11名であった。5段階評価を用い、各質問に自由記述欄を設けた。5段階評価は「5とてもそう思う(Strongly agree)」、「4そう思う(Agree)」、「3どちらともいえない

(Neutral)」、「2 あまりそう思わない (Disagree)」、「1 そう思わない (Strongly Disagree) とした。個人プロジェクトとグループプロジェクトでは、まず、次の 3 つの質問を共通で聞くことにした。回答は英語または日本語が可能である。

質問 1 ゴールは達成できましたか。(To some extent) Were you able to achieve your goal? Please write a number (5 being highest) and write down a few comments.

質問 2 どのぐらい予定通りできましたか。(To what extent) Were you able to align your weekly tasks with your goal? Please write a number (5 being the highest) and write down a few comments.

質問 3 このプロジェクトはあなたの日本語の勉強に役に立ちましたか。(To some extent) Was this project (=an individual project on Tuesday) helpful for your overall Japanese language study scheme?

Please circle a number (5 being the highest) and write down a few comments.

3. 1 「わたしの日本語プロジェクト」に関する振り返り

学生たちが自らの日本語を磨くために実施した「わたしの日本語プロジェクト」では、各活動を実践した学生たちが、どのような感想を持ったか報告する。

3. 1. 1 「わたしの日本語プロジェクト」質問 1 の回答

各質問に対する振り返りアンケートの結果を見ることとする。まず、質問 1 の個人活動の全体的な達成度について見ていく。11 の回答のうち、質問 1 ついては、「5 とてもそう思う」が 5 名、「4 そう思う」が 4 名、「3 どちらともいえない」が 1 名、「2 あまりそう思わない」が 1 名であった。「5 とてもそう思う」では、単語や翻訳を機械的に学ぶだけでなく、学生 1 のように活動で学んだことが、ほかの場面でも現れたこと、学生 6 のように翻訳活動を通じて内容を深めることにつながったことがわかる。「4 そう思う」を選択した学生は授業を欠席したことで予定が遅れ、達成度に影響していると考えられる。「3 どちらともいえない」と「2 あまりそう思わない」を選んだ学生は他科目との課題の調整や F2 期間で達成できる適切な目標設定ができなかったと思われる。以下、自由記述のコメント（原文ママ）である。特徴的な個所に下線を引いた。

【5 とてもそう思う】

- I am very happy with the result. Some of the words I learned in this class, I was able to recognize both in other classes, and in normal Japanese conversations. (学生 1Advanced)
- I translated it and was able to start translating another one. Besides, such the books were about Japanese legends, I could learn more about Japanese mythology. (学生 6Upper-intermediate)

【4 そう思う】

- I feel like it was great, but at the same time I missed out few classes, and didn't translate everything that I was going to. (学生 2Upper-intermediate)
- Yes I did! Because of all the exams and projects I did not had enough time to practice it recently, but I've translated and learned almost everything that I planned to. (学生 7Upper-intermediate)

【3 どちらともいえない】

- ・ 漢字が多過ぎて、他の授業の習い物を勉強しながら続けられなくて困りました。(学生 8Upper-intermediate)

【2 あまりそう思わない】

- ・ Translating process took way longer than I originally expected due to the use of high level, specialized vocabulary and no kanji reading identification(furigana) printed. (学生 10Advanced)

3. 1. 2 「わたしの日本語プロジェクト」質問2の回答

質問2の予定通りに進んだかについてである。「5 とてもそう思う」が5名、「4 そう思う」が4名、「3 どちらともいえない」が1名、「2 あまりそう思わない」が1名であった。「5 とてもそう思う」を選んだ学生たちは、計画した以上の収穫を得たことがわかる。自身のペースで活動できたことも要因の1つであることがわかる。「4 そう思う」では、欠席などで予定通りに進まなかったことや目標の変更により、当初の予定にズレが生じたことがわかる。以下、自由記述のコメント（原文ママ）である。特徴的な個所には下線を引いた。

【5 とてもそう思う】

- ・ I achieved my goal every class, and even learned some extra words. (学生 1Advanced)
- ・ Sometimes I could manage to progress more than it was planned. Most of the times I completed what was planned. (学生 5Advanced)
- ・ Since I was studying in my own pace I was to able to keep up with my weekly tasks. (学生 9Beginner)

【4 そう思う】

- ・ I missed a day, but I made myself to have that lesson at home. (学生 4Upper-intermediate)
- ・ Besides few missed submission. I think it was great. (学生 7Upper-intermediate)
- ・ Yep, though the past 2 days (individual study) I decided to change my first plan to just focus on translating. (学生 11Intermediate)
- ・ I was slowly progressing the translation sentence by sentence. But I originally expected to end up with more text reading. (学生 10Advanced)

3. 1. 3 「わたしの日本語プロジェクト」質問3の回答

質問3はこの活動が日本語の学習に役立ったかについてである。「5 とてもそう思う」が8名、「4 そう思う」が2名、「3 どちらともいえない」が1名であった。「5 とてもそう思う」では、個人のペースで活動できたことや集中的に日本語の学習に取り組めたこと、興味のある分野に関する内容を読むことで、学習効果を感じていることがわかる。「3 どちらともいえない」にあるように、実際の使用場面がわからないものは、学習効果を感じにくい様子が見て取れる。以下、自由記述のコメント（原文ママ）である。特徴的な内容には下線を引いた。

【5 とてもそう思う】

- I think it was very helpful. I like working individually, and this gave me the opportunity to do something extra other than homework for other classes. I don't think I would have learned all these words on my own if it wasn't for the time I got in these classes. (学生 1Advanced)
- 本当に役に立ったと思います。自分のペースで勉強できるのが本当にいいと思います。毎週、記事や本を読んだり、新しい単語を勉強したりできたと思います。(学生 3Advanced)
- Yes, I studied a lot of words for everyday life. The book I chose was a Tokyo travel guide which had really useful words for travel. After I finished the first book, the 2nd took only a little more than 1 class. (学生 5Advanced)
- This project forced me to practice my Japanese every week, not just study the grammar. (学生 6Upper-intermediate)
- Absolutely, since the Manga I was translating is about military, I even learned some military words. (学生 7Upper-intermediate)
- This course gave me more time to focus on Japanese as I had many assignments from other courses, it was really helpful. (学生 9Beginner)

【4 そう思う】

- It did! I learned a lot of new terms and grammar rules. In addition, I got to practice presenting skills in Japanese. (学生 2Upper-intermediate)

【3 どちらともいえない】

- I came across a lot of new vocabulary, but I don't find ways to use it in my everyday conversations. (学生 10Advanced)

3. 2 グループプロジェクト「先輩先輩から後輩後輩へのメッセージ」に関する振り返り

様々なレベルの学生たちがともに活動するグループプロジェクトで、各学生が今回の活動についてどのような感想を持ったか、見ていく。

3. 2. 1 グループプロジェクトに関する回答

質問 1 の目標が達成できたかについて、「5 とてもそう思う」が 4 名、「4 そう思う」が 7 名で、どのグループも当初の目的を達成できたことがわかる。次に、質問 2 の予定通りに進んだかについては「5 とてもそう思う」が 4 名、「4 そう思う」が 3 名、「3 どちらともいえない」が 4 名であった。「3 どちらともいえない」と回答した学生 1 は、教室内のグループ活動では、自分たちの経験について活発に話し、盛り上がる姿を度々見かけたが、活動内容をまとめることができなかったようである。そのほかにも学生 10 のように活動に必要な機材が準備できなかったことも予定通りに進まない要因になったことがわかる。「3 どちらともいえない」と回答した学生の自由記述（原文ママ）を次に示す。特徴的な内容に下線を引いた。

【3 どちらともいえない】

- This was our biggest struggle, since we never really decided on our weekly goal before coming to

class. We also sometimes had different ideas about how we should spend our time. (学生 1Advanced)

- As I didn't have much time directly before the class, I couldn't always prepare a device I could comfortably work on which made researching and editing quite difficult. I did most of the work outside of class. (学生 10Advanced)

次に、質問3はこの活動が日本語の学習に役立ったかについてである。「5とてもそう思う」が4名、「4そう思う」が2名、「2どちらともいえない」が3名、「2あまりそう思わない」が1名、未回答が1名であった。「5とてもそう思う」では、発表やメンバーとの活動か日本語を話す機会になったこと、日本の学生と話すことができたことなどが日本語の学びにつながったと感じていることがわかる。一方、「4そう思う」、「3どちらともいえない」、「2あまりそう思わない」の回答では、グループで活動することの難しさから日本語の学びが少なかったことや個人プロジェクトのほうが学びがあったとの回答があった。自由記述(原文ママ)を次に示す。特徴的な内容に下線を引いた。

【5とてもそう思う】

- As I said above, I really wanted to practice speaking Japanese, and I had the chance to do so in this class. (学生 6Upper-intermediate)
- そうと思います。他の学生と一緒に発表を作ったり、日本人の学生とも話したりできて、本当によく勉強できたと思います。(学生 3Advanced)
- Learned/ revised travel-related vocabulary learned to translate thoughts in a consistent, short, information-rich way. (学生 10Advanced)
- It was my favorite activity in this class! Presenting in Japanese made me practice fast thinking in Japanese and put words and grammar rules together that I usually struggle to do while speaking. It was my first time presenting in Japanese, and even though it was difficult and challenging, I got to learn a lot. (学生 2Upper-intermediate)

【4そう思う】

- I learned more Japanese from during my individual project. (学生 4Upper-intermediate)
- It was nice to research about our topic in Japanese and study the expressions connected to it. Overall we gathered useful knowledge but working in a group proved to be a bit difficult. (学生 5Advanced)

【3どちらともいえない】

- I'm not sure if the group project was helpful for my Japanese studying but I learnt more words. (学生 9Beginner)
- 日本語の勉強にあまり役に立ちなかったかもしれませんが、日本文化についてちょっと勉強しました。 (学生 8Upper-intermediate)
- It did surely help to improve my Japanese sentence creation but I don't think it will be used frequently. (学生 11Intermediate)

【2 あまりそう思わない】

- ・ I don't think it really helped me that much with Japanese, since the only thing I had to use my Japanese skills for was to make the 発表資料, which I didn't have to learn anything new to translate. I did however, get some tips from my girlfriend while writing it. (学生 1Advanced)

3. 2. 2 グループプロジェクトで楽しかったこと、大変だったことに関する回答

グループプロジェクトでは、さらに次の 3 つの質問をした。

質問 4 What skills and knowledge did you develop and / or acquire during the group project?

質問 5 How did you enjoy the group project? / And what did you learn from your classmate?

質問 6 What challenges did you experience during group work?

各グループがそれぞれグループ内の活動についてどのように感じていたか、以下に示す。

表 5 グループ 1 の振り返りシートより (原文ママ)

グループ	グループ 小テーマ	学生番号	日本語レベル	質問 4	質問 5	質問 6
1	東金のおい しいレスト ラン	学生 6	Upper- intermediate	<u>I practiced my Japanese speaking skills, but also my skills to work in a group.</u>	<u>It was fun, I enjoyed going out to have dinner some/same days with my classmates since we chose the topic of restaurant recommendations in Togane, and we watched to go there and try food. I learned a lot of design skills from my multimedia student friend.</u>	<u>Communication with everyone and making decisions which everyone agreed on.</u>
		学生 9	Beginner	<u>I got more confident when ordering my food in restaurants.</u>	<u>I enjoyed working in the design parts of presentation And taking pictures when going to restaurants.</u>	<u>Writing the script in Japanese was too difficult so I needed to ask my teammate to help me.</u>

グループ 1 は教室でインターネット上の口コミを調査したり、友人からおすすめを聞くなどしてから、実際にレストランに行き、そのレビューをまとめた。学生 6 も学生 9 も実際にレストランに足を運んで日本語で注文をすることで実践的な日本語の学びにつながったようである。また、設定した小テーマを楽しみながら、スライドの作成や日本語の文づくりなど、互いの能力を生かしながら活動していたことがわかる。しかし、メンバー全員が賛同する決定をすることに課題を感じていたようである。

表 6 グループ 2 の振り返りシートより (原文ママ)

グループ	グループ 小テーマ	学生番号	日本語レベル	質問 4	質問 5	質問 6
2	Intercultur al differences	学生 3	Advanced	<u>他の人と一緒に頑張ったり、発表をしたりするのが、授業に前と比べて、もっと簡単になったと思います。興味深いトピックについて、他の人の意見を聞いて、非常に面白かったと思います。いい勉強になったと思います。</u>	<u>素晴らしかったと思います。人によって意見が違っているから、新しく、興味深い遠近法を見えて、色々な面白い意見を聞けたと思います。</u>	<u>私にとって、他の人と一緒に頑張ったり、発表をしたのが大変だったと思います。私は他の人と一緒にいたら、自分の意見についてはなし苦手なタイプなので、ちょっと難しかったと思います。発表もちょっと苦手で、発表中、緊張すぎたと思います。私にとって、英語の発音は難しすぎて、恥ずかしかったかもしれません。</u>
		学生 8	Upper- intermediate		<u>楽しかったです。新しい情報をたくさん習いました。</u>	<u>あまりありませんでした。</u>

グループ 2 では、在学している留学生と日本の学生に対し、本音や日本語の間違いに対し指摘関するアンケートを実施し、88 の有効回答を得た。日本語で書かれたアンケート結果を手分けして分析するのは大変な作業であったが、見事に発表にまとめた。学生 1 は、グループでの活動が苦手ではあるものの、活動を通して以前より肯定的な思いが生まれたようである。また、メンバーとの意見交換やアンケート調査の結果から、様々な意見、文化的な側面を学べたことを楽しめたようである。

表 7 グループ 3 の振り返りシートより（原文ママ）

グループ	グループ 小テーマ	学生番号	日本語レベル	質問 4	質問 5	質問 6
3	Our ecommend ed things to do as a JIU student	学生 1	Advanced	Knowledge about cheap and 便利 options for living life in and around Togane that I wouldn't have known if I didn't discuss it with the other group members.	I think it was a bit of a stressful experience, but in the end I had a good time talking to my friends and working together. I learned to listen to the other group members more, even when I thought their suggestions were questionable. Sometimes when did what they suggested, it ended with a better result than I expected.	People were a little bit too laid-back during the classes, which made me worried that we might not be able to put together a good presentation in time for the presentation day. Or that maybe I would have to do extra work myself to get a good result, but thankfully this didn't happen.
		学生 7	Upper- intermediate	words and presentation skills	How to work more sufficient. She teach it are great PP techniques (using A.I). I think the group project was very fun.	To follow our schedule and finish everything on time.
		学生 4	Upper- intermediate	I sharpened my leader skills and also my English communication skills.	I learned a lot about different cultures and different viewpoints and how to combine them to create something greater.	None

グループ 3 は勉強から離れて楽しめる施設（レストラン、スポーツジム、ゲームセンター、買い物）を調査して発表にまとめた。この活動を通して、東金市周辺の情報を得たり、自身の能力の向上を感じたり、多角的な視点を得たり、メンバーのコンピュータスキルから学んだり、収穫があったことがわかった。しかし、メンバーの性格上、活動の取り組み方の違いから、意見がまとまらず、スケジュールの遅れにつながったようで、互いの意見を尊重する姿勢と忍耐を学んだようである。

表 8 グループ 4 の振り返りシートより（原文ママ）

グループ	グループ 小テーマ	学生番号	日本語レベル	質問 4	質問 5	質問 6
4	Travel tips	学生 10	Advanced	The advice we compiled and exchanged might come in useful in the future, when I plan my trips.		we had trouble synchronising our timing, which resulted in a little crisis right before the deadline.
		学生 5	Advanced	reading, kanji recognition, speaking, vocabulary	I learned useful tips for travelling in Japan	Some unimportant things were made to be a big problem which made working together difficult. And a group member leaving all the work for the last minute also caused problems.

グループ 4 は選択した小テーマから、自身らも旅行の有用な情報を得ることが楽しかったようである。しかし、グループで協働することは難しかったようである。教室以外の時間に集まろうとした際に時間的な制約があったことを困難点として挙げている。

表 9 グループ 5 の振り返りシートより (原文ママ)

グループ	グループ 小テーマ	学生番号	日本語レベル	質問 4	質問 5	質問 6
5	Ways to relax in Japan	学生 2	Upper- intermediate	<u>Presenting in Japanese, translating and doing my research from the Japanese sources.</u>	I enjoyed it a lot, it was a great way to learn Japanese and have fun at the same time. <u>My partner works very efficiently and precisely. She taught me techniques on presenting and translate some words and phrases.</u>	I skipped few classes and messed up the schedule I created for myself.
		学生 11	Intermedite	<u>Acknowledging Google translate is not good.</u>	<u>I don't like presentations</u> but well, was not that bad.	Presenting in Japanese.

グループ 5 では、インターネットを駆使し、東金市から行ける癒しの施設を調査した。その際、日本語のウェブサイトを利用して検索した。その際、自動翻訳が正確ではないことへの気づきがあったようだ。プレゼンテーションを行うことに対して、メンバー内で温度差はあったものの、相互に学び、学習を続けたことがわかる。

3. 3 Japanese Education A をどのように改善したらよいか

最後に、質問 8 として、このクラスをさらに良くするためにどうすればよいのか (What suggestions do you have to improve course?) 聞いた。その結果、短いものや個人でできるプレゼンテーションを取り入れることが挙げられた。プレゼンテーションをすることには大きな問題はないようだが、質問 7 でもグループ活動の難しさが挙げられていたことから、特に日本語力を向上させるためには、個人ですするという選択肢のあるプレゼンテーション活動があるのがいいのかもしれない。また、グループ内で使用する言語については、個人の選択としたが、メンバーとの関係から相手に合わせた選択をした学生もいたことがわかった。質問 8 に対する回答 (原文ママ) を次に示す。特徴的な内容に下線を引いた。

- If the goal is to improve our Japanese, maybe somehow integrate the use of the language more in the classes/project. However, In our case, I think this would have made our cooperation harder and more stressful, since the level of Japanese among the students are so different. So I don't have a specific idea, but I did personally feel like I didn't have to use my Japanese that much during the group project. Even though this was the decision of the group and our choice. (学生 1Advanced)
- More presentations (even if they were a bit shorter) it's the best way to learn grammar and words while speaking personally. (学生 7Upper-intermediate)
- To have an option for short individual presentations instead of the group project. (学生 5Advanced)
- More presentations, even if they were a bit shorter. I learned a lot, and had a chance to learn about different topics from others. (学生 2Upper-intermediate)

4. プロジェクト活動の振り返りと今後に向けて

本実践では、前年度に挙げた課題 (レベル差の大きいクラスの活動と興味を持てる話題選び) から、2 つのプロジェクト学習を取り入れて、クラスを進めた。そして、振り返りシートの記述から次年度への課題を探ることを目的とした。結果として、個人で学習の目的を設定して進める「わたしの日本語プロジェクト」は、多くの学生にとって日本語の学びにつながったことがわかった。総合的に日本語を学ぶ主教材クラスや試験対策クラスとは違い、「自分のペース」で「好きな内容」を進めることができたというのが、その要因であることがわかる。一方、やりたいことと実際にできることには時間的にも能力的にも両立しに

くく、主に翻訳活動をした学生たちは、思った以上に時間がかかったこと、翻訳する内容のテーマ選びが難しく、途中で変更した学生もいた。

グループプロジェクトでは、これから来日する学生に向けたアドバイスという共通のテーマから、さらにテーマを絞り、興味のあるテーマごとに集まり、グループで活動をした。課題となっていたテーマ選びは解決でき、活動中でも最終発表でも相互に学ぶ様子がうかがえた。また、グループ内の日本語能力には差があったものの、それを理由に活動の動機が下がることはあまり見られず、当初の課題は解決できたと思われる。しかしながら、メンバー間のプロジェクトに取り組む姿勢と効果的な日本語の学びに関しては課題が残った。

次年度に向けて、個人プロジェクトでは目標設定をする際に実現可能かどうかの見極め、グループプロジェクトではグループ活動の取り組み方、そして効果的な日本語の学びにつながる活動に注意し、教育方法を模索していきたい。

【注】

1. News Web EASY (<https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>) は、NHK が発信しているオンラインニュースでやさしい日本語を用いてニュースを伝えるウェブサイトである。
2. 日本語多読道場は、日本語レベルを N6～N1 に分け、日本の地理、食べ物、文化や歴史などについて無料で読むことができる日本語を勉強する人のための読み物のウェブサイトである。2024 年 8 月 1 日から有料化されている。

(さとう あきこ・城西国際大学 語学教育センター)

非言語を言語化する
—「言語・非言語コミュニケーション論」の実践報告—

鈴木 一徳

Making Nonverbal into Verbal:
A Practical Report of “Verbal/Nonverbal Communication” Class

Suzuki Kazunori

【要旨】

本稿は、2023 年度の S1 クォータに開講された「言語・非言語コミュニケーション論」（以下、本授業）の実践報告である。体験に基づく活動を通じた授業運営が学生の知的好奇心を刺激する方法を模索した結果を紹介する。さまざまな体験に基づくグループディスカッションをすることで、日頃無意識に行っている非言語行動に目を向け、それを観察・分析し、言語化することは、思考力を高めるトレーニングになり得ることを実例を用いて示す。さらに、非言語行動についての内省をすることで、効果的な対人コミュニケーションの在り方を模索するきっかけとしても有効であることを議論する。

Abstract

This paper is a practical report on the “Verbal/Nonverbal Communication” class, which was offered in the S1 for the AY2023 academic year. It presents the results of our search for ways in which class management through experience-based activities can stimulate students’ intellectual curiosity. Using actual examples, the paper demonstrates that group discussions based on various experiences can be used as training to enhance students’ ability to think by focusing on nonverbal behaviors that they unconsciously engage in on a daily basis, observing and analyzing them, and verbalizing them. Furthermore, we will discuss how reflection on nonverbal behavior can also be effective as an opportunity to explore the nature of effective interpersonal communication.

キーワード：言語・非言語コミュニケーション、体験、言語化

1. はじめに

本稿は、2023 年度の S1 クォータに開講された「言語・非言語コミュニケーション論」（以下、本授業）の実践報告である。体験に基づく活動を通じた授業運営が学生の知的好奇心を刺激する方法を模索した結果を紹介する。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 節では、授業計画やグループワークの方法、具体的なディスカッションの例を提示しながら授業概要を紹介する。第 3 節では体験に基づくディスカッションの具体例を紹介する。第 4 節では本稿のまとめと今後の課題を示す。

2. 授業の概要

2. 1 授業概要

本授業は、国際人文学部の国際文化学科・国際交流学科に設置されている日本語教員養成課程に設置されている授業の一つで、選択科目に位置付けられている。国際交流学科においては、専門科目群Ⅱ（国際コミュニケーション）の選択必修科目にも位置付けられている。シラバスで公開している本授業概要は以下の（1）に示す通りである。

- (1) 対人コミュニケーションでは、ことばを用いた言語的メッセージの他に、外見的特徴、身体動作、表情行動、視線行動、空間行動、接触行動、接近行動、文化的背景など、様々な非言語的メッセージが用いられます。本授業では、特に非言語コミュニケーションに関する現象・概念を考察し、実際のコミュニケーションの内省・分析を行い、非言語コミュニケーションの重要性及び対人コミュニケーションの機能を明らかにします。授業ではペアまたはグループでのディスカッションを毎回行うので、積極的な参加が求められます。

今年度の本授業の履修登録者数は 79 名で、内訳は国際文化学科 13 名、国際交流学科 64 名、交換留学生 2 名であった。大人数の授業ということもあり、シラバスに記載した通り、グループワークを頻繁に行い、学生同士で思考する時間を確保することに努めた。

2. 2 授業計画

授業は 13 回で構成されていた。第 1 回から第 3 回までは、本授業を受講する上で必須になる用語やその定義・例を導入し、各論に入る前のレディネスを整えることに時間を使った。第 4 回から第 12 回までは、言語・非言語コミュニケーションに関連するトピックを扱った。第 13 回では総括として期末試験の練習を行い（詳細後述）、その次の回に筆記形式の期末試験を実施した（詳細後述）。各授業回で扱った内容は表 1 に示す通りである。

表 1 授業計画の詳細（シラバスの記載内容に基づく）

授業回	内容
第 1 回	「言語」「非言語」「コミュニケーション」
第 2 回	「言語コミュニケーション」と「非言語コミュニケーション」
第 3 回	非言語コミュニケーションの種類・特性・機能
第 4 回	外見的特徴：身体、身なり、魅力
第 5 回	身体動作：ジェスチャー、ボディ・ランゲージ
第 6 回	表情行動：顔面表情、感情表出
第 7 回	視線行動：視線行動の属性・機能、アイコンタクト
第 8 回	音声行動：音声行動の分類、周辺言語、ターン相互作用、沈黙、感情表出
第 9 回	空間行動：空間行動の分類、個人空間、対人距離、テリトリー
第 10 回	接触行動：接触行動の分類、接触とコミュニケーション
第 11 回	接近行動：接近行動の分類、言語的・非言語的接近性、コミュニケーションスタイル
第 12 回	非言語コミュニケーションと文化

第 13 回	総括
	期末試験

授業内では、グループディスカッションの時間を多くとるため、意見交換や他者理解の機会としては十分に機能すると考えるが、個人単位の専門知識の習得のために、教科書としてヴァーガス（1987）を指定し、予習として次回の内容に関連する箇所を読んでくることを必須とした。また、さらに知識を深めたい受講学生のためには、参考書として、Patterson（2011）や Richmond et al.（2011）を紹介した。参考書の内容については、適宜講義の中でも触れるようにし、言語・非言語コミュニケーションを多角的に分析する授業を心がけた。

2. 3 授業の流れ

毎回の授業は表 2 の流れで進めた。冒頭は前回の内容の復習として、キーワードや現象の整理をした。その後、前回の提出課題の中で寄せられた質問に回答をした。その際、発展的なディスカッションに繋がりそうな内容は、振り返りディスカッションとしてグループで取り組むようにした。振り返りが一段落してから、本日のトピックの導入をした。その後、そのトピックに関連するディスカッションクエスチョンを提示し、グループでディスカッションをし、その内容をクラスで共有した。クラスで共有する際には、教員（筆者）は肯定的かつ生産的なコメントをすることに注力し、クラス全体でディスカッションする雰囲気を出創することを心がけた。ディスカッションクエスチョンは毎回 5 問程度用意し、グループでの活動、クラス全体での活動、教員による講義の 3 つの活動がテンポ良く回るように注意し、受講学生の集中力が高まるような工夫をした。そして、クラスでの共有の切の良いところで解説および講義を行った。最後には、クールダウンとして本日のトピックの簡単な振り返りをし、課題内容の解説を行った。

表 2 授業の流れ

目安時間（分）	内容
0～5	前回の内容の復習
5～15	寄せられた質問への回答 振り返りディスカッション
15～20	本日のトピックの導入
20～100	ディスカッションクエスチョンの提示 グループディスカッション ディスカッションの内容をクラスで共有 解説と講義
100～105	本日の授業内容のまとめ 本日の課題の確認

2. 4 ディスカッションクエスチョンの例

本授業の特徴はグループディスカッションが多数行われることにある。そのため、ディスカッションクエスチョン作成の際には、受講学生の興味・関心との関連に加えて、学問的にも興味深い内容、さらには

容易に唯一的な答えに辿り着けないような想像力を駆使するものの作成を心がけた。以下、(2) ～ (7) に実際に使用したディスカッションクエスションの例を示す。いずれのクエスションについても、単に「はい」「いいえ」で答えられるようなものではない、オープンクエスションになっていることが特徴としてあげられる。また、受講学生自身や他者の非言語行動について俯瞰・観察・分析する機会にもなることも期待していた。

- (2) 「いいよ」という同意を表す言語的メッセージであったとしても、それに付随する感情は多様であることが考えられる。では、どんな感情である場合に、どんな非言語的メッセージ（音声的特徴）が用いられるだろうか？書き出してみよう。
- (3) ある人に対して、魅力的（好意がある）か否かを判断する基準として、どこに注目しますか？なぜその部位に注目するのでしょうか？考えてみましょう。
- (4) 人と話すとき、その人のどこを見て話していますか？その部分を見ている理由は为什么呢？考えてみましょう。
- (5) 初対面の人との自己紹介（あいさつ）の過程で用いられる身体動作・ジェスチャーにはどんなものがあるか？思いつくものを書き出してみよう。それぞれの身体動作・ジェスチャーにはどんな機能があるのかも考えてみましょう。
- (6) アイコンタクトをするときは、どんなとき？具体的な状況とその時の感情について、考えてみましょう。
- (7) アイコンタクトを避けるときは、どんなとき？具体的な状況とその時の感情について、考えてみましょう。

ディスカッションクエスションの中には、複数のクエスションを通して非言語行動を観察・分析するようなものも用意した。(8) ～ (9) は、身体動作（ジェスチャー、ボディ・ランゲージ）のトピックで使用したクエスションである。まず(8)のようなクエスションで、【自然かつ無意識の状態】で自由にディスカッションを行う。そして、(9)のクエスションを提示し、改めて「大変さ」を表す際に、どのような身体動作が用いられていたかを振り返り、非言語行動の分析をした。このように、より自然な状況での対人コミュニケーションの場を創出し、その実体験をもとに観察・分析をすることで、内容の理解に結び付き、さらには発展的な問いに辿り着く訓練にもなると考える。

- (8) 今クオータで受講している授業の中で、一番大変な授業は何か、なぜ大変か、グループ内で情報をシェアしてみましょう。
- (9) 「大変さ」を表現する際に、どんな身体動作・ジェスチャーが使われていましたか？振り返ってみよう。

上記以外にも、体験に基づくディスカッションを行ったので、3節でその一部を紹介する。

2. 5 グループワークの考え方

前述の通り、本授業では、グループディスカッションに時間を割き、受講学生同士での意見交換の機会を重要視している。そのため、グループワークに関しては(10) ～ (12)のルールを設定した。

(10) 出席することは大前提

グループは 3 授業回は固定で活動するため、欠席するとディスカッションするメンバーが減ることになり、学びが深まらなくなってしまう可能性がある。

(11) グループワークへの積極的な参加が必須

あまり親しくない人とグループワークをすることに抵抗があるかもしれないが、自分のできる最大限の貢献をする。グループの意見をまとめるのが上手な人、意見を言うのが好きな人、新たな疑問を考えることに長けた人、発言は苦手だけど良い考えを持っている人など、様々な人がいることを認め、グループとしての最大限のパフォーマンスをする。

(12) 「分からない」「難しい」は禁句

グループワークにおいて、「分からない」「難しい」ということばを発することは、思考の放棄に繋がる。大学での専門的な学術的学びには「分からないこと」や「難しいこと」は付き物であることを認識し、与えられた問いについて徹底的に思考することこそが学問をすることの最大のよこびである。ただし、どうしても「分からない」「難しい」という状況に直面した際には、グループ内の他のメンバーに対して問かけることの大切さ(例「どう思いますか?」)を伝え、【思考し続けること】を強調した。

3. 体験に基づくディスカッション

本授業ではグループワークを多数実施し、その中には、(8)～(9)に示したような体験的に基づくディスカッションも多数実施した。本節では、その一部を紹介する。

3. 1 非言語コミュニケーションの導入

第 3 回の「非言語コミュニケーションの種類・特性・機能」の導入として、Will Stephen 氏による「How to sound smart in your TEDx Talk (TEDx で賢そうにプレゼンする秘訣)」という TEDx Talk の動画を【音声無し】で視聴し、どんな内容の話をしていのかをディスカッションさせた。動画では、スライドを用いて、白黒写真の科学者や数式・グラフを提示したり、聴衆に問い掛けたりしており、音声情報がない状態で視聴した場合、難しい話をしているように感じるものであった。そして、次に同様の動画を【音声付き】で視聴し、【音声無し】で視聴した際に感じたこととの差についてディスカッションさせた。実際に音声付きの動画を見ると、科学者の写真については『科学者』とググってでてきたもの」と言い、数式についてはその数式を音読するだけというように、全く内容の無い動画であった。しかし、【音声無し】で視聴した際に「何か難しい話をしていそうだ」と感じたのはなぜかを考えると、発表者の身なり(例:眼鏡をかけている)やボディ・ランゲージが何か重要な役割をしていることに明示的に気が付くという経験をする事ができたと思われる。

3. 2 視線行動の演習①: タイポグリセミア

「人が得る情報の八割から九割は視覚に由来すると言われています(伊藤 2015, p.5)」ということについてどう思うかをグループディスカッションした後に、2 つの実験的演習を行った。1 つ目は、タイポグ

リセミアというもので、単語の最初と最後の文字が正しければ、その間の文字は入れ替わっていても理解できるという現象である。つまり、人間の目は、見たものをそのまま認識しているのではなく、既に蓄積されている知識と照合して、都合の良いように読み替えているという体験をした。確かに、視覚から得られる情報は膨大であるが、その正確性についての議論が不十分であることを認識した。以下、図 1 に実際に提示したスライドを示す。

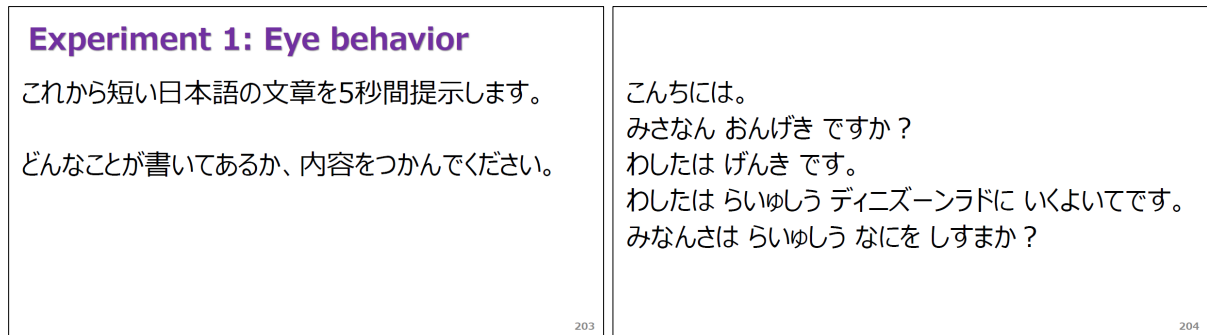


図 1 タイポグリセミアの演習の例

3. 3 視線行動の演習②：空書行動

日本の小学校に通っていれば誰もが経験があると思う「空書」についての演習である。「少し難しい漢字を提示するから覚えてください」という教示をし、30 秒間漢字を提示する。そして、30 秒後にスライドをオフにし、各自のノートに漢字を復元するように指示した。この演習では、漢字の復元率は全く関係なく、漢字を覚える際にどんな行動をしたかを改めて振り返り、分析することが重要であった。ノートに何度も書き写す人、スライドを注視し覚えようとする人、空書をする人など、覚え方はさまざまであった。その後のディスカッションで、「空書行動」について説明すると、この行動を無意識に行っていたことに気づき、記憶のメカニズムにも踏み入る議論に繋がった。付随して、Thomas (2015) の研究も紹介し、非日本語母語話者が漢字を覚える際に、空書で覚えた場合は、見たり書いたりして覚えた場合よりも有意に復元率が高かったということを説明した。



図 2 空書の演習の例

4. おわりに

本稿では、2023 年度の S1 クォータに開講された「言語・非言語コミュニケーション論」で実施した活動の一部を紹介した。さまざまな体験に基づくグループディスカッションをすることで、日頃無意識に行っている非言語行動に目を向け、それを観察・分析し、言語化することは、思考力を高めるトレーニング

になり得ると考える。さらに、非言語行動についての内省をすることで、効果的な対人コミュニケーションの在り方を模索するきっかけとしても有効なはずである。

今後は、さらに体験に基づいて「自分を語る」トレーニングを通して、学生の知的好奇心を高め、学問の方法を提示していきたい。

【参考資料】

Stephen, Will. (2015). How to sound smart in your TEDx Talk. TEDx Talk.

<https://www.youtube.com/watch?v=8S0FDjFBj8o>

【参考文献】

伊藤亜紗 (2015) 『目の見えない人は世界をどう見ているのか』 光文社

ヴァーガス, マジョリー F. (石丸正・訳) (1987) 『非言語コミュニケーション』 新潮社

Patterson, Miles. (2011). *More than Words: The Power of Nonverbal Communication*. Editorial Arest.

Richmond, Virginia., McCroskey, James., and Hickson, Mark. (2011). *Nonverbal Behavior in Interpersonal Relations (7th ed.)*. Allyn & Bacon.

Thomas, Margaret. (2015). Air writing as a technique for the acquisition of Sino-Japanese characters by second language learners. *Language Learning*, 65 (3), 631-659.

DOI: <https://doi.org/10.1111/lang.12128>

(すずき かずのり・城西国際大学 国際人文学部 国際交流学科)

ARCS モデルの考えを取り入れた「日本文化研修」の試み
—学習者の学習意欲向上と日本文化研修の教育の向上を目指して—

高柳 真理

An attempt at Japanese Culture Training course adopted the idea of the ARCS Model
- For Enhancing Learners' Motivation and Improving the Quality of Japanese Culture
Trainig-

Mari Takayanagi

【要旨】

「日本文化研修」は、別科の多くの日本語学習を主目的とした科目と違い、自律的な力、他者と協力し調和的な人間関係を築ける力の伸ばすことを目的としているディプロマポリシーに関連して設置されている科目である。そのため、「日本文化研修」は、日本語学習科目のように学生の日本語力の伸びによる学修成果の可視化ができない。そこで、今回 ARCS モデルの考えを授業内容に取り入れて、授業を実施し、授業終了後に学習者「科目の興味度調査」「学習内容の振り返り」シートを実施した。今回の試みで、教師が学習者の興味、意欲を持たせる視点から授業内容の組み立てが意識的にできること、そして、授業終了時のアンケート結果の内容を検討することにより、学習内容を学習意欲、関心・興味という点で客観的に捉えることができる結果となった。今後の「日本文化研修」をよりよくしていくために有効な方法になりうるということがわかった。

Abstract

Japanese Culture Training course differs from many other courses primarily focussing on Japanese language learning. This course is established in relation to the diploma policies aimed at developing autonomous skills and the ability to build harmonious relationships through cooperation with others. Therefore, the learning outcomes of the course cannot be visualized by evaluating the students' improvement in Japanese language proficiency, as is done in Japanese language learning courses. Hence, this time, the idea of the ARCS model was incorporated into the course content, and the end of the course surveis were done by the learners. From the perspective of engaging learners' interest and motivation, it can make possible not only the teacher's conscious organization of course content but also objectively grasping the learning content from the students' survey results. This could be an effective method for improving the Japanese Culture Training course in the future.

キーワード：日本文化研修、ARCS モデル、学習意欲、注意（A）、関連性（R）、自信（C）、満足感（S）

1. はじめに

留学生別科のディプロマポリシー（以下：DP）は3つある。その中で DP 1 は進学するための日本語能力の向上を目指しているものであり、目標設定も明確化されやすく、到達度テストや外部の日本語検定試

験などで評価がしやすい。それに対して、DP 2 と DP 3 に関連する内容の授業科目では、シラバスによって目標設定、内容などが明確にされているが、その質の向上のための評価という点では、日本語能力の評価のようにはっきりを示されるものがない。また、進学目標イコール日本語能力の向上と考えやすい傾向が見受けられる別科生に、日本語学習に特化した科目以外の学習内容に意欲を持ち、自らの興味、関心からの目標の明確化を意識させ学習に取り組ませることは重要である。そこで、今回 ARCS モデルの考えに基づいて、日本文化研修の評価を行い、今後の教育の質向上に向けて考察する。

2. DP と日本文化研修の位置づけ

2. 1 別科の 3 つの DP

城西国際大学留学生別科は、進学準備を主とした予備教育型の教育機関である。その DP として 3 つのポリシーがある。以下はその 3 つのポリシーである。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定方針）（便覧より）（注 1）

留学生別科は、所定の単位を取得し、かつ以下に該当すると判断した場合に、日本語専修課程、日本文化専修課程の卒業を認定し卒業証書を授与する。

- 1) 自分の将来を具体的に考え、その進路へ進むために必要な日本語能力と知識を有し、活用することができる。
- 2) 生活、学修面で生じる課題や問題に対し、自ら考え解決をはかる能力を有し、自律的に目標を立て、遂行することができる。
- 3) 様々な文化を背景とする人々を尊重し、多文化共生社会の一員として、コミュニティの中で調和的な人間関係を築くことができる。（ルビ抜き、アラビア数字筆者加筆）

まず、この 3 つの DP における「日本文化研修」の位置づけを見てみたい。

2. 2 DP 2 と DP3 に関係がある日本文化研修

上記の DP の内容を見ると日本文化研修は DP 2 で掲げている「課題や問題に対して自ら考え解決をはかる能力を有し、自律的に目標を立てて、遂行することができる」に関連がある。というのも、目的地と大まかな日程は教員側で決め、その目的も説明されるが、文化研修日 1 日の計画や、グループと個人の目標も自分たちで作成し、その実行を行うものだからである。DP3 に関しては、日本文化研修では、その準備、実行、まとめをグループ活動を中心に行う授業であるため、グループという学習コミュニティの中で調和的な人間関係を築きながら学習を進めていくこと、また、日本社会に実際に出て研修をするため、その地域での人々との接触もあるからである。では、具体的にどのような目的で日本文化研修科目が設置されているのか、またその授業の概要はどう説明されているのかを次に述べたい。（2023 年度 F2 シラバスより）

日本文化研修の目的

この研修では、日頃は教室で日本語や日本文化に関する授業で学んでいるが、それらの座学で得た知識を、実際に見学や体験することにより、総合的に理解を深めるとともに、新たな発見や興味を引き出し、今後の学習への動機づけとすることを目標とする。また、グループで協力

して旅行の計画を作成し、グループメンバー全員がその計画通りに行動することを通して、ルール順守の重要性和協調性の大切さを学ぶことも目標とする。

授業の概要

グループ学習を中心に行う。研修先について自分たちで調べあげ、その内容をまとめる。研修日の目的やグループ行動の計画を立て、グループ内でのルール、各人の役割を決め、協力して学習活動を行う。研修日には、自分たちで計画した予定に沿って、学習、グループ活動を行う。研修後の授業では、学習した内容、グループ活動、計画実行の振り返りを行う。研修についてまとめたものを最終日に発表をし、フィードバックを受けるとともに、自己評価も行う。

「日本文化研修」は、日本文化や社会について実体験を通して学ぶことや、自ら自主的に学習内容を決め、グループで計画を立てて実行、そのまとめとして発表を行う。自律的に目標を立て遂行する、グループで協力して学習するなど、PD2とDP3の内容と深く関連のある科目である。

2. 3 今までの日本文化研修の目的地と通常授業となった日本文化研修科目

これまでの研修先としては、次のような場所が挙げられる。上野公園／アメ横及び東京国立博物館、横浜／横浜科学博物館、江戸東京博物館／東京タワー、成田山新勝寺／空港科学博物館、鎌倉、東京江戸博物館、東京証券取引所、皇居、国会議事堂、国立歴史民俗博物館、自然科学博物館、千葉県立房総の村、三溪園での日本の歴史的建築物と庭園、成田山新勝寺、成田観光館、千葉市谷東の里、鎌倉周辺、東京タワー、アクアライン「海ほたる」、横浜中華街、浅草などである。この科目は、2022 年度までは、通常授業のように授業時間が時間割にあるものでなく、研修前、研修日、研修後に時間を決めて実施する科目であった。日本の文化や社会を研修地で得る実際の経験から学習し理解、まとめることを目指してきた。そして、シラバスに基づいて学生の成績評価を行ってきた。しかし、日本語学習を主とした科目では、その授業内容を学生の日本語能力の向上の可視化によって評価することができるのに対し、「日本文化研修」は日本語学習を主目的としないため、その授業内容の質や改善に向けての評価をどのようにするかは課題であった。

その「日本文化研修」科目は、2023 年度から通常授業となり時間割に組み込まれた。つまり、週1回の授業時間（105 分）が7回と研修日という授業形態になった。これを機に、従来実施していた毎回の学生の成績評価に加えて、改善に向けて授業の内容、質自体を評価する何かしらの方法があつてよいのではないかと、また、進学するための日本語能力育成中心の科目でないが、意欲的に取り組んでもらうために、学習意欲の視点からのアプローチができないか、検討した。その結果、学生の学習意欲に関する概念的な考えが取り入れられ、それにより教員が学生に意欲的学習への働きかけができるARCSモデルを取り入れることとした。そして、授業終了後にその視点から評価調査をすることによって、授業内容を評価し、授業の質の改善を目指すことができるのではないか、毎回研修先が変わるこの科目を1回、1回断片的な授業科目から、各回を連続的な繋がりとして質の面で評価できるようになるのではなだろうか、という検討質問を持ち、今回、学習意欲をデザインするARCSモデルの考えを取り入れた授業を実施した。

3. ARCS モデルの考えを取り入れた日本文化研修

3. 1 「日本文化研修」科目の特異性

「日本文化研修」の研修地は、学習する必要がある内容、学習者が関心を持っている内容、そして、1

日日帰りの研修であるため、物理的に研修が可能となる場所などが考慮されて決められる。日本文化研修先は毎回変わるが、毎回学習者に学習意欲を持たせ、研修に取り組ませることは非常に重要である。J. M. ケラー (2010) は、「意欲 (Motivation) とは、人々が何かを望み、何を選んで行い、そして何を行うことに全力を傾けるかを一般的に意味する。」また「人々が何を目的として選び、それを達成するためにどの程度、活動的で熱心に取り組むかを説明する、」と述べている (M. J ミラー 2010 p. 4)。その意欲を学習現場においてデザインするもの、つまり学習意欲をデザインするものが「ARCS モデル」である。この「A」「R」「C」「S」は、この学習意欲デザインが 4 つに分類した「Attention」「Relation」「Confidence」そして「Satisfaction」の頭文字を取ったものである。このケラーが提唱した ARCS モデルについて、中井らは「ARCS モデルは教育活動の魅力を高めるインストラクショナルデザインの手法であると同時に動機付けモデルでもあり」(中井ら 2022 p.22) と述べており、この学習モデルを「日本文化研修」の授業の質向上の取り組みにと取り入れることは効果できであろうと考えた。

3. 2 ケラーの ARCS モデル

提唱者の J.M.ケラーによると、この ARCS モデルは、4 つの領域の分類からなっており、それらは、「注意 (Attention)」、「関連性 (Relevance)」、「自信 (Confidence)」、「満足感 (Satisfaction)」であり、この 4 つ領域において意欲を刺激・保持するための方略を作り出すことを可能にするとしている。この 4 つの領域の各々の内容は、J.M.ケラーによって以下のように表によって示されている。(J.M.ケラー 2010, p.47)

表 1 ARCS モデルの分類

主分類枠	定義	作業質問
注意 (Attention)	学習者の関心を獲得する。学ぶ好奇心を刺激する	どのようにしたらこの学習体験を刺激的でおもしろくすることができるだろうか？
関連性 (Relevance)	学習者の肯定的な態度に作用する個人的ニーズやゴールを満たす	どんなやり方で、この学習体験を学習者にとって意義深いものにさせることができるだろうか？
自信 (Confidence)	学習者が成功できると、また、成功は自分たちの工夫次第であることを革新・実感するための助けをする	どのようにしたら学習者が成功するのを助けたり、自分たちの成功に向けて工夫するための手がかりを盛り込めるだろうか？
満足感 (Satisfaction)	(内的と外的) 報奨によって達成を強化する	学習者がこの経験に満足し、さらに学びつづけたい気持ちになるためには何をしたらよいだろうか？

出典：『学習意欲をデザインする ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン』
(J.M.ケラー著 (鈴木克明 監訳) 2010 p.47)

この4分類にはそれぞれに下位分類もあり主な支援方略もJ.Mケラーによって示されている。今回の「日本文化研修」では、授業内容の組み立てをする段階で、上記の表を基本とし4つの分類に関する作業質問、そして、4分類の下位分類の主な支援方略も参考にして教師の働きかけに関する支援方略を作成した。

3. 3 ACRS モデルを利用した「日本文化研修」授業のための支援方略

表2 「日本文化研修」授業のための支援方略

主分類	下位分類		支援方略
注意 (A)	A1	興味の獲得 (知覚的 喚起)	◆知覚的に好奇心や興味を引くようにする。 ・学習者の持っている関心を結びつける工夫をする。 ・新しい情報を注目や驚嘆が創出できるように工夫する。 ・教員は、学習している学習者、学習内容に対して熱意を表す。
	A2	探求心の刺激 (喚起)	◆私的好奇心を刺激し、探求心を持たせる。 ・学習者にいろいろな質問、課題を投げかける。 ・好奇心を強めるために、視覚教材、実際の予備経験をさせる。
	A3	注意の維持 (変化性)	◆授業内容に変化を持たせて注意を維持する。 ・学習内容に関連する資料を使う。 ・クラス合同学習やグループ活動や個人的活動などで変化を持たせる。
関連性 (R)	R1	目的指向性	◆学習者のニーズにこたえる。 ・この授業が学習者に役立つことを意識させる。 ・自分たちでこの研修のゴールを定義させる。
	R2	動機との一致	◆授業のインストラクションと学習者の学習スタイル、個人興味を結び付ける。 ・各学習者の目標設定、記録ノート、振り返りをさせ、フィードバックをし、学習者の学習内容の把握と方向性を知る。 ・各学生の興味の度合いを把握し、動機付けや達成の機会を与える。 ・協調的なグループ活動をする課題を与える。
	R3	親しみやすさ	◆インストラクションと学習者の経験を結びつける。 ・日本で生活している上での経験(地震)、学習者が興味あるアニメの視点から教材や学習内容を工夫する。
自信 (C)	C1	学習要求	◆よい学習結果が期待できるように支援する。 ・学習者の考えが段階を追って深まるようにする。 ・毎回の授業の振り返りノートに学習できた面(肯定的面)、今後期待される学習面についてのフィードバックの中で説明する。
	C2	成功の機会	◆学習者の目標/目的、学習内容が一致するようにする。 ・設定した学習者の達成目標に近づいていることを各授業後の提出物フィードバックで伝える。
	C3	個人的なコン	◆個人差を理解し、考慮した授業内容を展開する。

		トロール	・グループ活動が多いが、その中でも学習者が自分のペースで進めるように工夫、促しをする。
満足感 (S)	S1	内発的な強化	◆個人的な努力と達成に対する肯定的な気持ちを強めるようなフィードバックをする。
	S2	外発的な強化	◆学習した内容を客観的に捉え、実感できる機会を持つ。 ・毎回の学習内容ノートの完成 ・文化研修のまとめとしての発表会
	S3	公平感	◆授業で期待された内容と学習者のタスクと達成に一貫性がある。 ・評価内容を前もって示す。

「方略」とそれに関連する「方策」について J.M.ミラーは「方略は一般的なガイドラインであり、目的を達成するための全体的なアプローチである。一方、方策は方略を実現するために役立つ特定の活動を示す。」と述べている。(J.M ミラー 2010, p24)。この作成された「方略」をもとに具体的にどのような授業展開、活動をするのかの「方策」を考え、授業を実施した。

4. 授業の実践

4. 1 「日本文化研修」の授業

授業期間：2023 年度 F2 クォーター（11 月 22 日～1 月 24 日）

授業回数：週 1 回 計 7 回 （1 回の授業時間は 105 分）

対象留学生数：7 名

日本文化研修の目的、及びその授業概要は前述の通りである。

研修目的地：池袋 東京アニメステーション、消防庁池袋防災館

研修目的地を決定するにあたっては、学習者の日本語学習のきっかけが自国で見た日本のアニメや漫画だった学生が多かったことと、またメディア学部への進学希望者が多く、アニメやクラフィックなどに興味のある学生が多くいたことと、2023 年 10 月 31 日に「東京アニメステーション」がオープンした話題性のある施設であることを理由に決定された。「消防庁池袋防災館」は、自国で地震を経験したことがほとんどない留学生が地震大国、日本に留学し、生活の中で必ず経験するため、日本を知るという点では重要であると考え候補地となった。教員が実際に下見に行き、日本語レベルが初級から中上級までの留学生が教員の工夫によってレベルに合わせてこの防災館での学習できることが確認でき、なおかつ消防庁池袋防災館からも見学の許可が下りたため決定された。この授業対象学習者は 7 名であったが、別科全体では 25 名、クラスは 3 クラスがあった。この 7 名はその 3 クラスの 1 クラスの学生で、グループ活動時は 4 名と 3 名の 2 グループで活動した。

4. 2 7 回の授業内容

7 回の授業は下記の内容で実施した。「日本文化研修」授業のための支援方略を教員はチェックし、どのような方策をすることで実現できるか考えながら授業組立を行った。その支援方略については、学生が授業後のまとめ提出後の F B も含めると、毎回、A、R、C、S の方略があった。特に力を入れた方略については、アルファベットで示した。

第 1 回 3 クラス合同授業（最初を全体⇒その後各クラス活動⇒各グループ活動）

文化研修の目的の理解

1 日の行動スケジュール

グループ分け（リーダー決める、役割分担、目標、スケジュール）

池袋について調べる

東京アニメステーション（学習のテーマ、できること、したい事等）

池袋防災館の日程も含めて、グループ行動時間の予定を立てる

文化研修用の学習ノートを配布し、それに沿って学習を進める。

今日の学習活動について日本語で学習ノートにまとめる。

学習ノートは毎回授業終了後に学習したことをまとめて、教員に提出、F B を受ける。

毎回の学習振り返りの学習ノートの返却、FB することによって A、R、C、S が含まれた。

導入時に学生に好奇心や興味を持たせるように工夫を特にした。（池袋、アニメ、防災）

A-1、**A-2**

第 2 回 3 クラス合同授業（最初を全体⇒その後各クラス活動⇒各グループ活動）

消防庁家袋防災館 体験ツアー（4 つ）

ツアーを知る／今までの自分の体験、知識と結び付ける

実際の経験をイメージし注意事項の理解

この体験のために自分が覚えたい日本語、表現リストを作り整理する。

自分の日本での生活の振り返り、地震の経験（誰もなかった）など **R 3**、個人差 **C3**

防災館の実際の訓練のシミュレーションなど **A 2**

第 3 回 クラス単位での学習（グループ活動中心）

防災館での 4 つの体験ツアーの確認

自分の経験に関連づけて考える

体験についての予測、自分の考えをまとめる

問題が生じた時の対応を考える

同日の注意事項（見学、体験時の態度、服装、時間など）確認

留学生活で起こりうる災害、すべき防災について調べておく

学習者の目標、学習内容が一致しているか、特にチェック、意識化を行う。 **C2**

12 月 9 日 研修実施日

グループ単位で行動、グループ、個人の決めた目標、計画に沿って研修をする。

第 4 回 クラス単位での学習（個人活動⇒グループ活動）

研修についての振り返り

各項目で目標としたことが達成できたか。(％示す。文章で表す)

東京アニメステーションで学習したこと、感想、コメント

防災館の 4 つの体験（地震、VR、火災消火、煙避難）で学習内容、感想、コメント

グループ活動で、予定通りに行動できたか、目標の達成について

各自の学習内容、コメントを共有する。

グループ発表について内容を検討しておく。

特に **S1**、**S2**、**C3** に力を入れた。

第 5 回 クラス単位（個人活動⇒グループ活動）

研修についての個人の振り返り **FB** とその確認

発表準備（発表の目的、構成、発表分担について）

グループ活動、何を伝えたいか、どう授備を進めるか、

発表原稿のドラフトを書き、添削チェックを受け、修正や加筆をする、**PPT** 完成

発表についての練習（発音のチェック、実際の練習をする

どのように発表を評価するのか **C3** を示した。 **C2**

第 6 回 クラス単位（個人活動⇒グループ活動）

修正、加筆した発表原稿の確認

グループで 発表内容、順番の確認、原稿の読み合わせ ピアコレクションを実施

PPT を使って最終練習

最終原稿、**PPT** の提出 **C2**、**S2**

学習ノートの整理し提出 **C3**、**S2**

第 7 回 3 クラス合同授業（最初を全体⇒その後各クラス活動⇒各グループ活動）

合同発表会（学内からの見学者あり） 各グループで発表し、質疑応答を受ける。

グループ活動

発表の振り返り、よりよい発表のための課題等を考え、クラスで意見交換する。

個人活動

日本文化研修の振り返り、自己評価（研修前、研修日、研修後）

学習ノートを整理後提出し、**FB** を受ける。 **S1**、**S2**、**S3**

以上の授業内容で 7 回の日本文化研修授業は終了した。

5. 授業を終えて

5. 1 ARCSモデルの使用で教員に見えたもの／意識化できたこと

今回、このARCSモデルを用いたことにより、毎回の授業で必ず「注意 (Attention)」、「関連性 (Relevance)」、「自信 (Confidence)」、「満足感 (Satisfaction)」の分類項目、その支援方略を意識し、どのように授業にその方策を取り入れるか考えた。また、『学習意欲をデザインする ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン』の pp302 - 303 の「表 11. 12 動機付け実施チェックリストの項目一覧」も参考にした。これらのARCSモデルの考えによって、以前の授業の行った教員の働きかけと同じ行動であっても、学生とのやり取りで今何を行っているのか、どんな影響を学生に今与えているのかが意識化でき、より自分の行動が客観視できた。また、自分の行動として、学習者の「自信 (C)」につながる働きかけが今までは少なかったのではないかと感じた。今回、この「自信 (C)」項目にある方略の C2 に関してはかなり以前より多く意識的に行った。

このような項目があることにより、授業組立時にもう少しこの方略の方策を考えてみようなど、より学生の意欲を高める内容の授業を目指すことができた。

5. 2 ARCSモデルの使用で学生側から見えてきたもの

今回学生からの評価を見るために、『学習意欲をデザインする ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン』の pp290 - 291 にある「科目の興味度調査」を授業終了後に実施した。この調査は、一部、学習者に合わせた日本語表現への変更、また、アンケート対象者が全員中国語母語話者だったため、翻訳機を使用した中国語を付け加えたものを使用した<末尾資料 1 >。また、「日本文化研修の科目を終えて」というアンケートも実施した<末尾資料 2 >。

5. 3 「科目の興味度調査」の結果

「科目の興味度調査」について、最終授業時にこのアンケートの調査の目的と依頼を説明し、授業終了後に各自にグーグルフォームで行ってもらった。回収率は、対象者 7 名全員が答え 100%となった。この「教科の興味度調査」の質問は、4 つの項目「注意 (Attention)」、「関連性 (Relevance)」、「自信 (Confidence)」、「満足感 (Satisfaction)」に関連する質問が全部で 34 問ある。1 ～ 5 のスケールで答えてもらうものであるが、質問の中には得点が反転となるものもあった。

各項目の結果を見てみたい。

「注意」項目の結果 (図 1) から、学習者はかなりの興味を持ち続け学習を続けたことが分かる。教員の工夫としては、多くの視覚教材を使用し、オーセンティックな内容、学生の日本語レベルに合わせた資料を作成して使用した。10 の質問項目「教員は要点／重要なことに近づくときに、ドキドキ感を演出した。」の評価が一番低いので今後はこの点にも工夫を加えることで、より興味、好奇心をもった授業内容となることが予想される。

注意

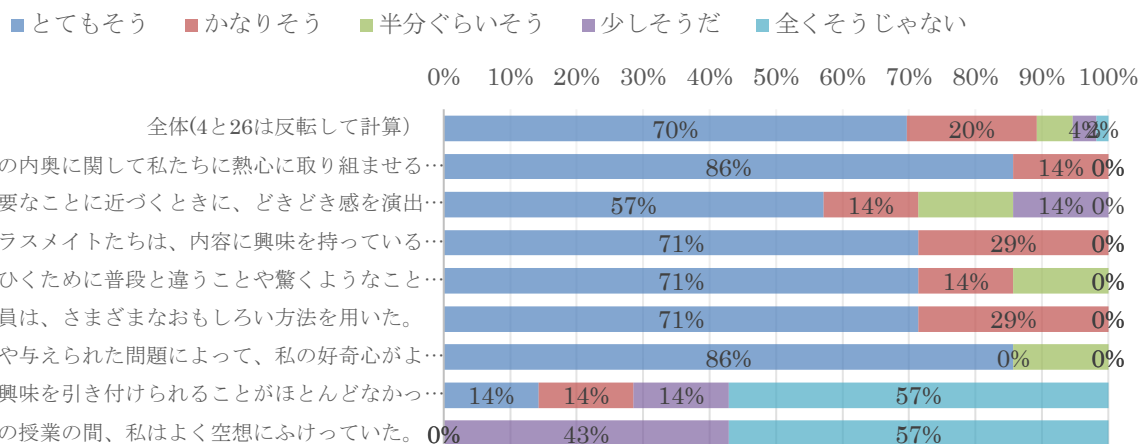


図1 科目の興味調査 「注意」項目の結果

関連性

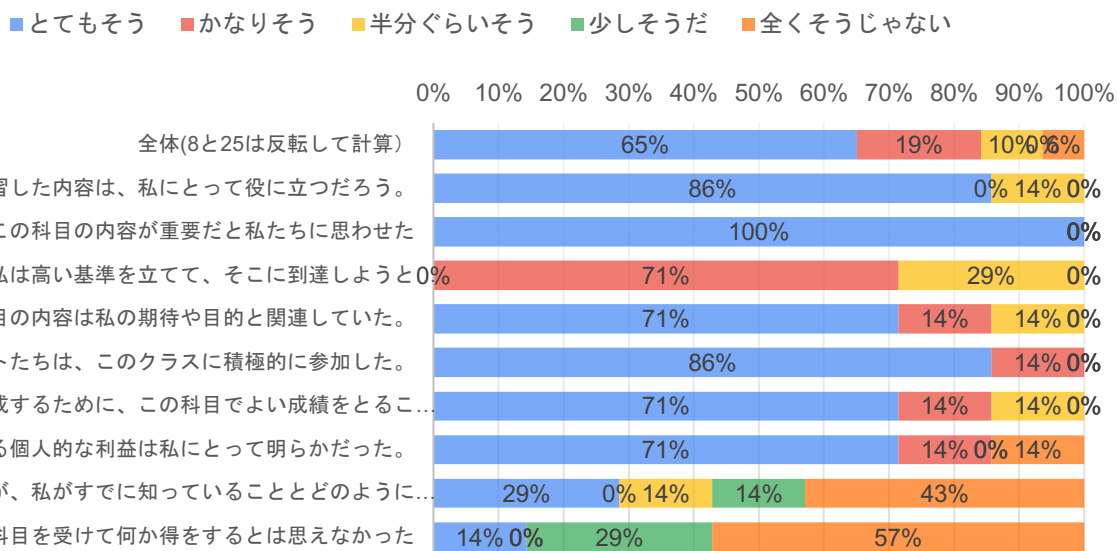


図2 科目の興味調査 「関連」項目の結果

図2の「科目の興味調査」の結果では、13「このクラスで私は高い基準を立てて、そこに到達しようとしていた。」に関して「とてもそうおもう」と答えて学習者はおらず、「かなりそう」と答えたものが多かった。日本文化研修の目的は教師側で説明したが、目標は各自、グループ共に学生が自分たちで決めた。これに対し、教員は目標の確認と学習がその方向に向かっているかどうかの確認をしていた。しかし、この調査から見ると、学習者個人、グループの目標設定の段階でもう少し教員が高い目標に持ち上げるような働き掛けがあったほうがはよかったという結果ではないかと考えられる。

自信

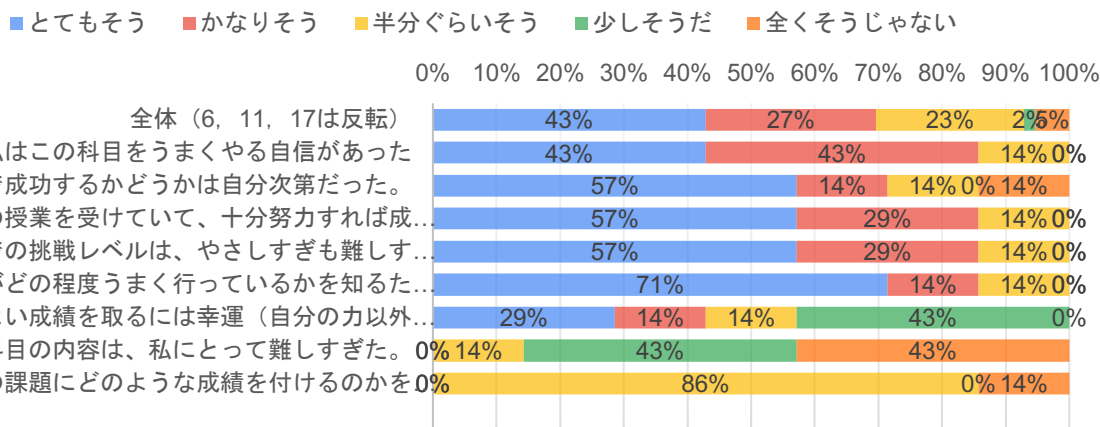


図3 科目の興味調査 「自信」項目の結果

他の項目のグラフと較べると、「とてもそう」と選んだ割合が全体的に低くなっている。前述した通り教員側の気づきとして、「自信 (C)」に関する学習者への働きかけが、以前は少なく感じ、今回は学習者に対して意識的に多く行ったのであるが、この結果からは教員から学習者に自信を持たせる促しがまだ少なかったのではないかと推測される。また、17番「教員が私の課題にどのような成績を付けるのかを予測するのは困難だった。」に対して「半分ぐらいそう」と答えたものがほとんどだった。シラバスで成績評価配分を明確にしているうえに、最後のまとめとしての発表では、発表準備開始時に発表評価シートを配布し説明、それに沿って準備を十分進めるように促したが、成績の評価の予測ができないと思っていたことが分かる。この点は、今後もう少し学習者に分かるように伝えとともに、目標到達までのどの時点まで達成されているのかをはっきり示す工夫をする必要があると分かった。これにより、学習者はより自分が行っている学習から自信を得ることができる。

満足感

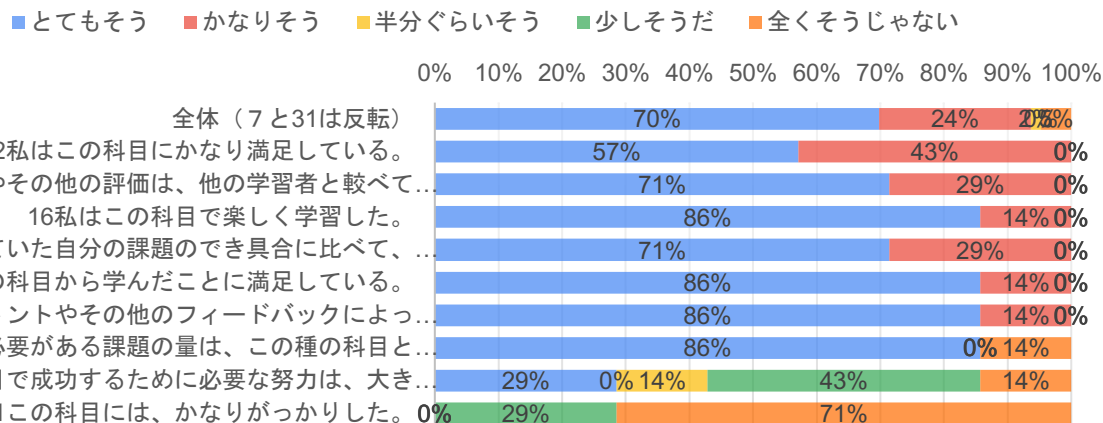


図4 科目の興味調査 「満足感」項目の結果

図4の「満足感」の項目では、かなり高い割合で満足をしているという結果となった。しかし、16「私はこの科目で楽しく学習した。」割合が高いのに対して、12「私はこの科目にかなり満足している。」の割合がそれより低い。このことは、楽しかったが、学習内容ではもう少し満足がほしかったという学生がいる表れではないだろうか。7名とアンケート対象者数が少ないため、一人の選択の違いでも大きな割合の差となるが、この点、つまり、「楽しさ」と「満足」のバランスは今後の日本文化研修授業でも考えていかなければならないことである。

今回、ARCSモデルの考えを取り入れることにより、教員はA、R、C、S項目を意識して授業を行ったが、授業終了時に同じ4つの項目に対して学習者がどのように評価していたのかを照らし合わせることで、この授業内容に対する客観化された実態が見えてくることが分かった。次に最終授業時に授業内で実施した「日本文化研修の科目を終えて」についての結果を述べたい。

5. 2 「日本文化研修の科目を終えて」の結果

このアンケートは、学習者自身がどのように自分の学習取り組みについて評価しているかを主としたものである。

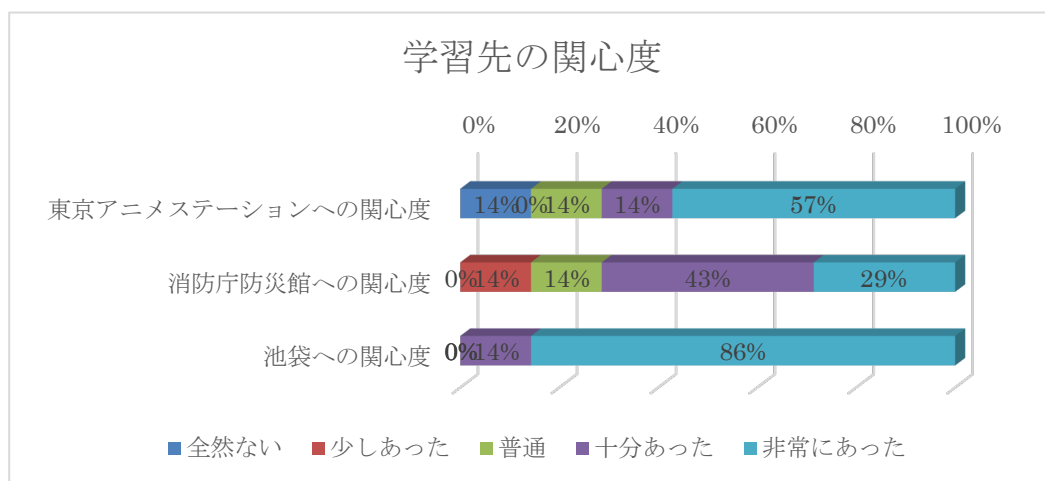


図5 文化研修前の関心度

図5から、今回選んだ研修先、池袋について学習者は、最初からかなり高い関心度があったことが分かる。また、2023年10月にオープンした「東京アニメステーション」への関心も「非常にあった」と「十分あった」で71%と高かったことが窺える。これに対して、「消防庁防災館」への関心は低かったことが分かる。

しかし、図6の学習先での学習度をみると、「防災館」で学んだことについて「非常にあった」と「十分あった」で100%になっている。このことから、研修先を選ぶ際に、学習者の興味・関心を考慮することも大切であるが、学べるものが多い場所を選ぶことが、学習させるという点では重要であることがわかる。その防災館での学習内容の詳細については、図7のような結果になった。

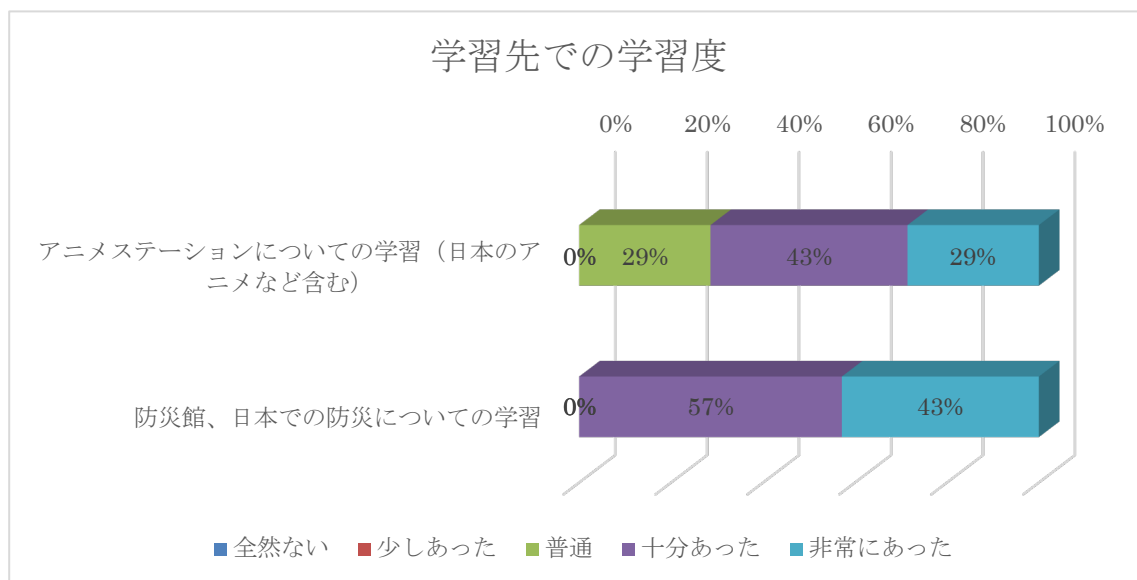


図6 学習先での学習度

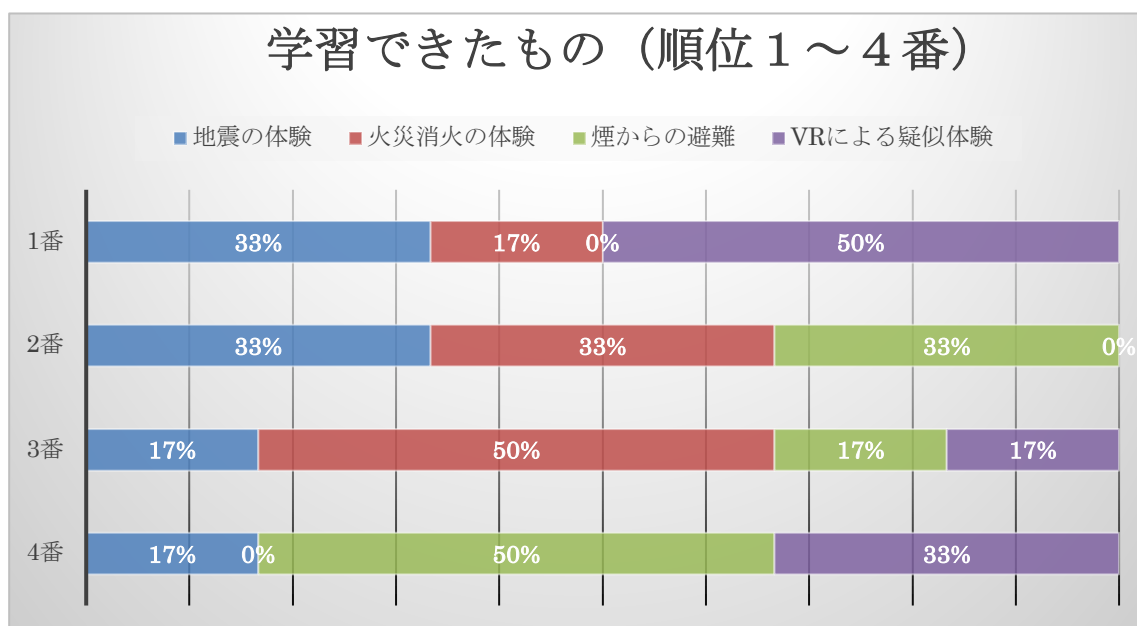


図7 防災館で学習した内容の順番付け

防災館では、4つの体験学習があった。それは、「地震の体験」「火災消火の体験」「煙からの避難の体験」そして、「VRによる疑似体験」である。VRによる疑似体験は、実際に体験した前述の3つの体験プラス水害の被害の体験をヴァーチャルに経験するものだった。この中では、「VRによる疑似体験」が最も学習できた内容とする学習者の割合が一番多かった。次に多かったのは、実際の地震の揺れの体験だった。

文化研修当日の自らの行動についての結果は次のようになった。「防災館での学習態度」では、消防庁の方々に失礼のないような学習態度を取る（おしゃべりをしない、きしんと話を聞き指示に従う等）ことを、研修前はかなり力を入れて行った。この結果から見ると、学習者も見学者として責任を持った態度で学習をしたと意識していることが分かる。また、研修前に、日本の社会に入って行われる研修では、個人だけでなく、城西国際大学留学生別科の一員としての行動が求められることを学習したことの反映とも言える。

グループ活動も重要な学びの点であったが、グループで決められた約束もみなが守っていたことが分かる。

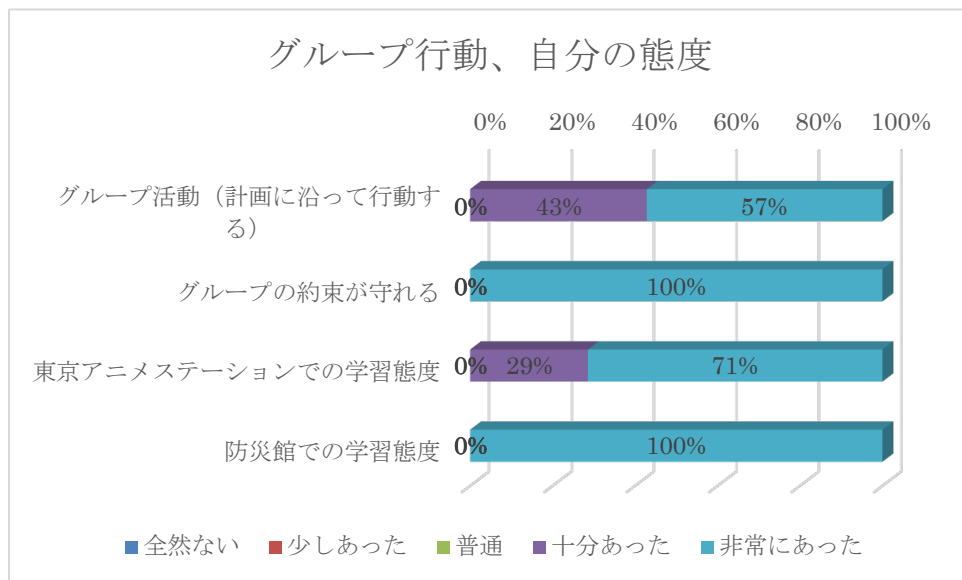


図 8 日本文化研修当日について

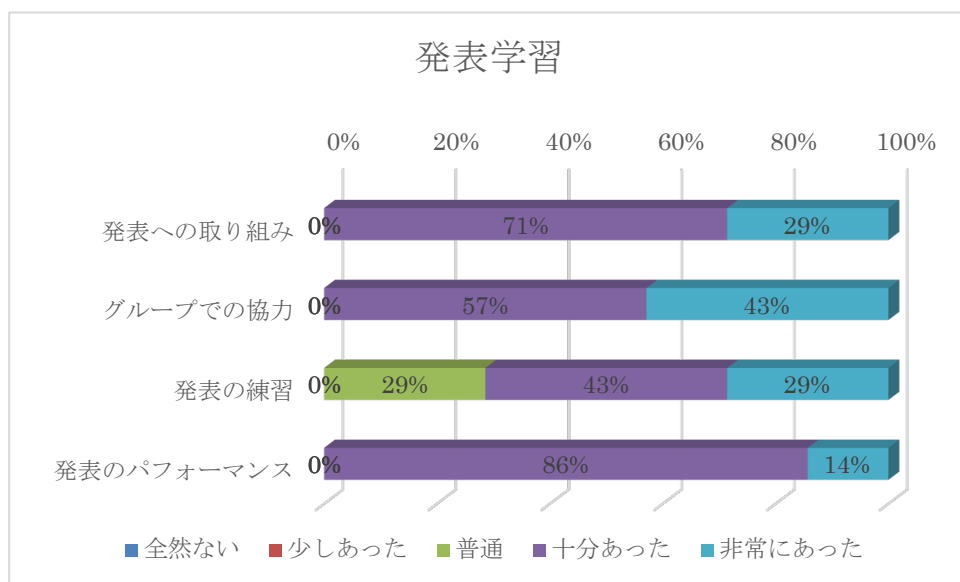


図 9 発表について

「学習発表」については、「発表練習」の良い評価の割合が他の項目に比べて低い。発表練習の多くは、家庭学習になるため、学習発表の練習をどう効果的にするかが、今後の課題ともいえる

以上が、授業終了時、授業終了後に実施した 2 つの学生によるアンケートの結果とそれらからわかることである。

最後に、学習者から自由回答で書いてもらったコメントについて紹介したい。

コメント（日本語は一部変更あり）

- ・今回の研修はとても重要な体験で、アニメ制作の大切さを感じました。これからも素晴らしい作品を作ること为目标に勉強を頑張ります。

- ・今回の研修は、いろいろなことを学ぶことができ、いろいろな状況で自分の安全を守る方法を知り、有意義な体験になりました。それだけでなく、私たちはグループの協力を介して、学友の友情も深め、団結と協力の能力を学びました。
- ・研修の過程は楽しくて多くのことを学びました。しかし、最後の発表の時は自分の最善を尽くすことができなかった。次は最善を尽くすように努力します。
- ・今まで地震を経験したことがないので、意義ある感じです。他に重要なセキュリティーの知識も学びました。発表の時に緊張して、自分が練習した状態はよかったが、同じようにできなかった。発表では、発音のミスが多かったので、次はしっかり頑張ります。
- ・VRの体験は楽しかった。地震の体験は自分の体の体験で面白かった。防災館でいろいろな防災の知識を勉強しました。
- ・防災館のVRの体験はもっとも面白かった。研修はとても楽しかった。また研修に参加したい。
- ・研修はとても面白いです。いろいろな災害の経験をしました。避難や逃げ方を理解しました。また、日本語も学びました。

5. まとめ

「日本文化研修」は、2023 年度から週一で行われる授業科目となった。進学を目的とした予備教育の別科では、学習者は日本語学習に力を入れるが、別科卒業までに育成すべき DP2 と DP3 に関わる科目についても意欲を持って学習してもらう必要がある。今回は、学習意欲をデザインする SRCS モデルの考えを用いてその試みを実施し、内容を検証した。この4つの分類の視点は、授業を組み立てる上で、教員にその意識化を行い自己の態度を4つの視点からある程度客観視することができると分かった。また、その同じ4項目に対する学習者からのアンケート調査を行うことによって、教員の働きかけと学習者の意欲につながる項目別結果を比較し、授業内容に関して検証することができた。今回の結果では、「自信（C）」に関して教師の働きかけを改善していく必要があることが見えた。また、研修先については、学習者の研修前、研修時の学習に対する意識から、研修地選定に対する評価も分かり、その後の研修地選択時に参考となりうることが分かった。

今回の取り組みは、ARCS デザインの考えを取り入れて授業に反映させる程度と言えるものであったが、今後、今回使用した「動議付け実施チェックリスト」をこの科目に沿った項目で作成し使用する。また、今回作成した「日本語文化研修」授業のための方略リストをよりよいものにし、それを実践する方策についても検討を加えることで、授業組立時に利用、授業内容の把握に効果をあらわすことができる。この ARCS モデルによるインストラクショナルデザインは、日本文化研修科目の質向上を目指すのに有効なものであり、今後、今回の実施から更なる発展した効果的な使用を目指したい。

【注】

注 城西国際大学ホームページ 留学生別科 キャンパスライフ 留学生別科便覧 授業関係
2024 年度留学生別科学生便覧
<https://www.jiu.ac.jp/files/user/bekka/campuslife/pdf/8.%E6%8E%88%E6%A5%AD%E9%96%A2%E4%BF%82%E5%BC%882024%E5%BC%89.pdf>

【参考文献】

J.M.ケラー, 鈴木克明監訳 (2010)『学習意欲をデザインする ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン』北大路書房

中井博基・中井隆司 (2022)「小学校中学年における ARCS モデルを活用した授業づくりとその成果に関する実践研究」奈良教育大学教職大学院研究紀要『学校教育実践研究』14, pp.21-30

<資料 1>

日本文化研修の授業について

今後の日本文化研修の授業をよりよくしていくためにアンケートをしたいです。ご協力をお願いします。

このアンケートは 34 の項目で構成されています。今、終了したこのクラスについて、それぞれの項目がどれくらいあてはまるかを示してください。自分が本当に思うものを選んでください。5つのレベルから選んでください。

1=全くそうじゃない 2=すこしそうだ 3=半分ぐらいそう 4=かなりそう 5=とてもそう

为了改进未来的日本文化研修课程，我们希望进行一项调查。请您提供协助。

这份问卷由 34 个项目组成。请针对刚刚结束的这门课程，选择每个项目对你的适用程度。请真实选择自己认为的程度。请选择五个级别中的一个：

1 = 完全不适用 2 = 稍微适用 3 = 大致适用一半 4 = 相当适用 5 = 非常适用

1. 教員は、科目の内容に関して私たちに熱心に取り組ませる方法がわかっていた。
教师知道如何让我们对科目的深层内容充满热情并努力投入。
2. この科目で学習した内容は、私にとって役に立つだろう。
在学习这门课程的内容对我来说将会很有用。
3. 私はこの科目をうまくやる自信があった。
我对这门科目能够取得好成绩充满信心。
4. このクラスには興味を引き付けられることがほとんどなかった。
在这个班上很难引起我的兴趣。
5. 教員はこの科目の内容が重要だと私たちに思わせた。
教师让我们意识到这门科目的内容是重要的。
6. この科目でよい成績を取るには幸運（自分の力以外のもの）が必要だった。
在这门科目中取得好成绩需要一些幸运（超出个人努力的因素）。
7. 私がこの科目で成功するために必要な努力は、大きすぎた。（負担が大きかった。）
为了在这门科目中取得成功，需要付出的努力太大了（负担太重）。
8. この科目の内容が、私がすでに知っていることとどのように関連するのかが分からなかった。我不知道这门科目的内容与我已经知道的内容有什么关联。
9. この科目で成功するかどうかは自分次第だった。
在这门科目中成功与否取决于自己。
10. 教員は要点／重要なことに近づくときに、ときどき感を演出した。

教師在接近要点/重要事項時製造了一些ドキドキ感。(心跳)

11. この科目の内容は、私にとって難しすぎた。

这门科目的内容对我来说太难了。

12. 私はこの科目にかなり満足している。

我对这门科目感到相当满意。

13. このクラスで私は高い基準を立てて、そこに到達しようとしていた。

在这个班上，我设定了高标准，并努力达到那个水平。

14. 私の成績やその他の評価は、他の学習者と較べて公平だったと思う。

我认为我的成绩和其他评价与其他学习者相比是公平的。

15. このクラスのクラスメイトたちは、内容に興味を持っているようだった。

这个班级的同学们似乎对内容很感兴趣。

16. 私はこの科目で楽しく学習した。

我在这门科目中学到了很多，并感到很愉快。

17. 教員が私の課題にどのような成績を付けるのかを予測するのは困難だった。

预测教师将如何评价我的任务是困难的。

18. 私が思っていた自分の課題のでき具合に比べて、教員の評価には満足している。

与我期望的自己任务完成的情况相比，我对教师的评价感到满意。

19. この科目から学んだことに満足している。

我对从这门科目中学到的内容感到满意。

20. この科目の内容は私の期待や目的と関連していた。

这门科目的内容与我的期望和目标相关。

21. 教員は、興味をひくために普段と違うことや驚くようなことを行った。

为了吸引兴趣，教师采取了平时不同和令人惊讶的方法。

22. クラスメイトたちは、このクラスに積極的に参加した。

同学们积极参与了这个班级。

23. 私の目的を達成するために、この科目でよい成績をとることが重要だった。

为了实现我的目标，取得这门科目的好成绩是重要的。

24. 教員は、さまざまなおもしろい方法を用いた。

教师采用了各种有趣的方法。

25. この科目を受けて何か得をするとは思えなかった。

我觉得参加这门科目没有得到什么好处。

26. この科目の授業の間、私はよく空想にふけていた。

在这门科目的课堂上，我常常陷入空想。

27. この科目の授業を受けていて、十分努力すれば成功できると信じていた。

在上这门科目的课时，我相信只要努力就能成功。

28. この科目による個人的な利益は私にとって明らかだった。

这门科目带来的个人收益对我来说是明显的。

29. このクラスの内容について尋ねられた質問や与えられた問題によって、私の好奇心がよく刺激された。

对于关于这个班级内容的问题或给出的问题，我的好奇心经常被激发。

30.この科目での挑戦レベルは、やさしすぎも難しすぎもしないと感じていた。

在这门科目中，挑战的难度水平既不太容易也不太困难。

31.この科目には、かなりがっかりした。

对于这门科目，我感到相当失望。

32. 評価やコメントやその他のフィードバックによって、この科目の課題への私の取組みが十分認められていることを感じていた。

通过评估、评论和其他反馈，我感觉到我的对这门科目任务的投入得到了充分的认可。

33. 私がする必要がある課題の量は、この種の科目としては適切だった。

在这种类型的科目中，我需要完成的任务量是适当的。

34.私は自分がどの程度うまく行っているかを知るために、十分なフィードバックを得ていた。

为了了解自己的表现如何，我得到了足够的反馈。

このアンケートは無記名アンケートです。誰がどう答えたかは分かりません。このアンケート結果を今後の日本文化研修をよりよくするための資料として使用してもいいですか。（アンケート結果を集計します。レポートを書きます。今後の参考資料にします。）

这份问卷是匿名的。我们无法知道谁如何回答。您是否可以将此调查和结果用作未来日本文化培训的更好资料？（我们将统计调查结果，撰写报告，并将其用作未来的参考资料。）

*

はい

いいえ

『学習意欲をデザインする ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン』 pp290-291

※一部、学習者に合わせた日本語表現への変更、また、アンケート対象者が全員中国語母語話者だったため、翻訳機を使用した中国語を付け加えた。

<資料 2>

2023 年度 F2 日本文化研修の科目を終えて

名前_____

この科目の振り返りをしましょう。

スケール ①—②—③—④—⑤

①全然なかった ②少しあった ③ふつう ④十分あった ⑤非常に（とても）あった

チェック（) を付けてください。

例 ①—②—③—④—⑤

日本文化研修前

- ◆東京アニメステーションへの関心度 ①——②——③——④——⑤
- ◆消防庁防災館への関心度 ①——②——③——④——⑤
- ◆池袋への関心度 ①——②——③——④——⑤

学習への取組み

- ◆東京アニメステーションについての学習
(日本のアニメなど含む) ①——②——③——④——⑤
- ◆防災館、日本での防災についての学習 ①——②——③——④——⑤

日本文化研修当日

- ◆グループ活動(計画にそって行動する) ①——②——③——④——⑤
- ◆グループの約束が守れる ①——②——③——④——⑤
- ◆東京アニメステーションでの学習度 ①——②——③——④——⑤
- ◆防災館での学習度 ①——②——③——④——⑤

防災館で一番学習できたと思うもの—— () 番号を入れてください。

- () 地震の体験
- () 火災消火の体験
- () 煙からの避難
- () VRによる疑似体験

★ どうしてそう思うか、理由を書いてください。

日本文化研後

- ◆発表への取組み度 ①——②——③——④——⑤
- ◆グループでの協力度 ①——②——③——④——⑤
- ◆発表の練習度 ①——②——③——④——⑤
- ◆発表のパフォーマンス ①——②——③——④——⑤

研修を終えての感想、コメント

(たかやなぎ まり・城西国際大学 語学教育センター)

山武市外国人児童生徒の日本語支援としての交流活動
—学部ゼミ生の事例から—

林 千賀

Exchange activities as Japanese support for foreign students in Sanmu City From the
case of undergraduate Seminar students

Chiga Hayashi

【要旨】

本稿は、筆者が担当する城西国際大学の演習 H ゼミ（3 年/4 年ゼミ）の地域外国人児童生徒のための日本語支援活動の 1 年間の振り返りの報告である。H ゼミでは、2022 年から千葉県山武市のスリランカ児童生徒の日本語支援を目的にした交流活動を行っている。本稿では、まず、2023 年度は、どのような活動をおこなったのか振り返った上で、終了後の振り返りのアンケート調査について、テキストマイニングで分析した結果を報告する。

Abstract

This paper is a one-year review of the activities of Josai International University University's Seminar H (3rd and 4th year seminars) to support Japanese language for local foreign students with foreign roots. Since 2022, H Seminar has been conducting exchange activities aimed at supporting the Japanese language of Sri Lankan students in Sanmu City, Chiba Prefecture. In this paper, I first look back on what kind of activities were carried out in year of 2023, and then report the results of the analysis of the awareness survey after the completion of the survey using Text Mining.

キーワード：外国人児童生徒、交流会、「やさしい日本語」、実践の場

1. はじめに

本学の東金キャンパスがある東金市に隣接する山武市は、親の仕事の都合でスリランカにルーツを持つ児童生徒が 2021 年度以降急増しており、現在、市内の小中学校 9 校が受け入れ、取り出し授業を行っている。2023 年 10 月時点で、同市における外国人児童生徒数は約 80 名で、小学校には約 60 名、中学校には約 20 名が在籍しており、そのうち、60 以上の児童生徒がスリランカ国籍（教育委員会関係者提供資料より）で、外国人児童生徒のおよそ 80%を占めている。市の支援体制も前例のない国からの受け入れに対し、着手したばかりで試行錯誤で支援を行っているのが現状である。従って、ほとんどのスリランカ児童生徒は取り出し授業を受けており、9 校にはそれぞれ日本語教育の支援者が配置されている。2023 年 1 月 18 日、山武市教育委員会と本学との間で「山武市の外国籍の児童・生徒への日本語教育支援に係る連携協定」が締結されて以来、本学の日本語教員（以後、日本語専門家と呼ぶ）たちも、日本語支援に携わるようになった。専門家たちは、教育支援員を対象に講習会や授業

観察などを行い、意見交換するなどして間接的ではあるが、外国人児童生徒のための日本語支援が行われるようになった。

Hゼミでは、2022 年 7 月から外国人児童生徒を対象に日本語支援を目的とした交流会が月に 1 度行われるようになった。Hゼミの授業では、日本語教育と「やさしい日本語」、異文化コミュニケーションを学んでおり、この交流会は外国人児童生徒のための日本語支援だけではなく、多文化共生を推進する林ゼミ生の実践の学びの場ともなっていることが振り返りの意識調査で明らかとなった。林ゼミでは「やさしい日本語」を「日本の外国人住民の増加に伴う新しい地域社会のあり方として国籍や民族の違いを超えた『多文化共生の地域づくり』のための『多文化共生』」（林 2023:43）と位置づけ学んでいる。本稿では、まず、2023 年度の交流会の活動内容を振り返った上で、活動後の意識調査結果について知見をまとめる。

2. Hゼミの取り組み

2.1 実践につなげるための学び

Hゼミには、3 年、4 年で合計、30 名ほどのゼミ生がいる。Hゼミでは、「やさしい日本語」の理解を促すためにまず、地方自治体が行なっている「やさしい日本語」の取り組みなどについてホームページなどで調べ、発表し合いながら学んでいる。また、自分たちがどのように記述文から「やさしい日本語」にするのか、「日本語読解学習支援システム」の「リーディングチュウ太」を利用し、「やさしい」と判定されるまで、語彙の修正を行うなど練習を重ねた。この「リーディングチュウ太」は、川村よし子氏が 1999 年に開発したテキストの日本語レベルを判定するシステムで、今では世界中の日本語教育関係者や日本語学習者が活用している（川村 2012）。そして、どうすれば日本語がやさしくなるのか、自分たちで考えてもらった。これらは、記述文に対する「やさしい日本語」の活動であったが、コミュニケーションにおいても話す日本語をやさしくするという点においては同じであった。そして、山武市の外国人児童生徒の交流会では「やさしい日本語」でコミュニケーションできるようになることを目指した。子どもたちとのコミュニケーションにおいて、特に気を付けるように指示していることは、以下の 8 つの項目である。以下、長野県「やさしい日本語を使ってみよう」を参考に筆者がスリランカ児童生徒に話す時の心得として学生に示した。

- ① 「です・ます調」で話すこと：例) ×「できる？」○「できますか」
- ② なるべく漢語を使わず、和語を使うこと：例) ×「朝食」○「朝ごはん」
- ③ 小学校高学年以上レベルの漢字にはルビをふること：×「黒板」○「黒板^{こくばん}」
- ④ 漢字は学校、教室、生活と使う場面にわけて導入すること
- ⑤ 抽象語を避け、絵教材やジェスチャーで示せる語彙を導入すること
- ⑥ 尊敬語・謙譲語は使わないこと
- ⑦ 二重否定や曖昧な表現は使わず、簡単な単語を使うこと
- ⑧ ゲームを交えて楽しく日本語を学んでもらうこと

学生たちは上記に気をつけながら交流会を行っていた。しかし、交流会に参加してくれた外国人児童生徒の日本語レベルは毎回、異なっていたため、事前に教材を作成しても、その場で内容を変更

したりレベルに合わせた工夫をしたりしなければならなかったため、学生には臨機応変に対応する力が求められた。

2.2 交流参加者と開催場所

交流会は、山武市にある「さんむ わくわく館」(NPO 法人 教育サポート GAA) と夏休みは本学キャンパス内で月に 1 度、実施された。参加してくれた児童生徒たちは、幼稚園生、小学生 1 年生から 6 年生まで、そして中学 1 年生から 3 年生までと幅広く、また、日本語のレベルも全く話せない児童生徒から基本的な日常会話は話せるという子どもたちであった。国籍はスリランカ人が 95%以上で日本語が全く話すことができない学生には英語で意思疎通を図ることができた。2023 年の交流会に参加してくれた児童生徒の多くは 2022 年の活動から参加していたので、2023 年は、限られた言葉になるが「やさしい日本語」で話しかけて理解できるレベルであったが話せない子どもたちもいた。

2.3 交流会の開催日と内容

表 1 では 2023 年度の交流会の日程を前期、夏休み中、後期の 3 つにわけ、概要、H ゼミの参加人数を示した。交流会の内容は、①のカルタゲームや②のビンゴなどのゲームを行い、③は、読み聞かせ、④は、文化紹介として毎月、異なった内容を実施したが、後期からは算数のかけ算を実施した。教材は試行錯誤を繰り返しながら全て学生たちが作成した (図 1)。

表 1. 交流会の開催日と内容、H ゼミ生参加人数

	交流会の概要	H ゼミ生参加者
<u>前期</u>	① 動詞 (30 語) 絵教材 (反復・代入練習) とカルタ	5 月:12 人
5 月 18 日	② 漢字カード (小学 3 年程度の生活編) とビンゴ	6 月:18 人
6 月 28 日	③ 読みき聞かせ	7 月:13 人
7 月 13 日	④ 5 月文化体験:新聞で兜づくり	
場所:	6 月文化体験:だるまさんが転んだ	
山武市わくわく館	7 月文化体験:七夕:願い事	
<u>夏休み中</u>	① 形容詞 (30 語) 絵教材 (反復・代入練習) とカルタ	7 月:11 人
7 月 27 日	② 漢字カード (小学 3 年程度の教室編) とビンゴ	8 月 3 日:12 人
8 月 3 日	③ 読み聞かせ	8 月 23 日:14 人
8 月 23 日	④ 7 月文化体験:キャンパスツアー	8 月 30 日:14 人
8 月 30 日	8 月文化体験:習字	
場所:	8 月文化体験:盆踊り	
東金キャンパス	8 月文化体験:運動会 (体育館)	
	・借り物競争 (動詞と名詞の絵教材)	
	・フルーツバスケット (アニメ登場人物)	
	・だるまさんが転んだ (動詞変換)	

	・リレー競争	
後期	① 動詞 (30 語) 絵教材 (反復・代入練習) とカルタ	10 月 12 日:8 人
10 月 12 日	② 漢字カード (小学 4 年程度の学校編) とビンゴ	12 月 14 日:10 人
12 月 14 日	③ 読み聞かせ	
1 月 11 日	③ 掛け算 (フラッシュカードと 100 ます計算)	1 月 11 日:13 人
わくわく館		



図 1. 学生たちが作成した教材の 1 部

まず、表 1 の①の「動詞・形容詞 (30 語) 絵教材 (反復・代入練習) とカルタ」では、動詞や形容詞の語彙については『げんき I』(The Japan Times 出版) を参考に毎回 20 から 30 個を選び、絵教材を準備した。絵教材は無料でダウンロードできる教材を選び、ラミネートにかけ何度も使用可能にし、復習できるようにした。参加してくれる児童生徒は毎回違い、日本語のレベルも異なるため、準備していた教材が難しかったりやさしかったりして予定通りには行えないということもあり、学生たちは苦戦していた。しかし、子どもたちも学生たちの顔は笑顔で溢れていた。

まず、絵教材を使い、反復練習や代入練習をした後は、必ず、カルタゲームをして定着を図ったので、子どもたちは楽しく学ぶことができた (図 2)。ゼミ生たちが子どもたちに行った振り返りチェックによると交流会は、毎回、とても楽しく学べたという感想であった。

また、日本語レベルが上達した子どもたちには、カルタゲームの取り方を工夫させた。例えば、「食べますか」と学生が言い、子どもたちに「いいえ、(と言ってカードをとったあと) 食べません」と否定形の練習をさせるようにして、工夫した。他にも「話しますか」と学生が言い、「いいえ、(と言ってカードをとったあと) 話してください」と言わせるなどして「て形」の練習をした。このようにカルタゲームの際には、子どもたちのレベルに合わせて様々な工夫をするよう指導した。それは、同じ絵教材を使用しても取らせ方の工夫で難易度を調整することができるからである。また、参加する子どもたちが新しく来た場合は、まず、日本人学生だけでゲームをやり、ゲームの内容を理解させた。ゲームのやり方を説明するのではなく、デモンストラーションをして理解させるよう指示を出した。学生たちは、どうしても説明しがちになり、「やってみせる」という考え方にシフトするのに時間がかかった。



図2. 学生たちが作成した絵教材でカルタゲーム：導入やカルタゲーム

次に表1の②の「漢字カードとビンゴ」(図3)では、小学校3年生から5年生の漢字を毎回、15個ほど準備させ、PPT(パワーポイント)で読む練習などをしてもらった後、まずは、児童生徒が自分で漢字を選び、ビンゴシートに書き込み、完成させたあと日本人学生も一緒になってゲームを行った。9つの漢字を入れられるビンゴシートに書き込むときは、学生が一人一人の児童生徒に対して書き順などを教えながら、ビンゴシートを完成させた。ビンゴゲームは、ビンゴになるよう自分の書いた漢字を読ませることで、漢字の定着がはった。

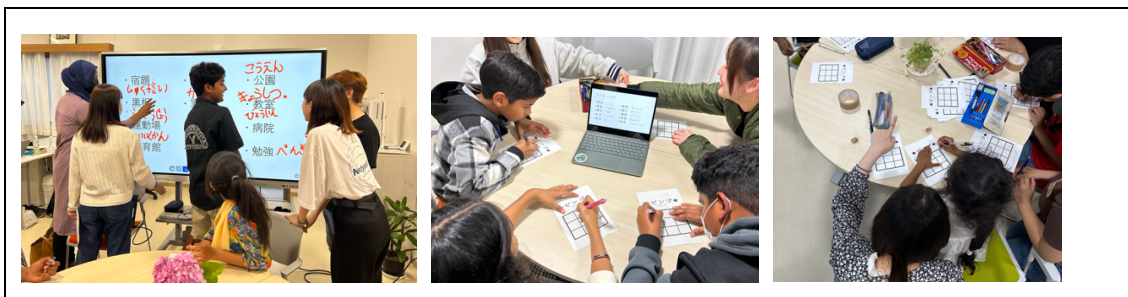


図3. 漢字の導入後は、ビンゴシートに書き込んで、ビンゴゲームを開始

次の表1の③は「読み聞かせ」で、アスク社のレベル別の『日本語多読ライブラリー』の本の中から子どもたちの日本語レベルに合わせて、読み聞かせを行った(図4)。その際に児童生徒たちと自由に話をするよう指導した。



図4. レベル別の日本語多読ライブラリーの読み聞かせ

最後の表1の④は「文化紹介」(七夕)と「かけ算」の練習である。文化紹介は、七夕のほか、兜づくり、「だるまさんが転んだ」、盆踊り、習字、運動会など楽しめるものを行った。学生たちは、子どもたちが楽しく遊び、日本語の練習にもなる活動を考え実施した。例えば、「だるまさんが転んだ」で

は、「転んだ」の動詞を「寝た」「食べた」「飲んだ」「起きた」「書いた」などの動詞に変換し、学んだ動詞の代入を行いながら、実施していた。その際、子どもたちはジェスチャーをして動作をしなければならないので、笑いながら楽しくゲームをすることができた。その際も動詞の絵教材で語彙を確認した上でゲームを行った。

また、かけ算の活動は、山武市教育委員会からの強い要望で後期から実施されることになった。「かけ算」の練習は、まずはフラッシュカードで口頭練習したあと、学生が作成した「百ますかけ算」のシートで練習し、定着をはかった。



図 5. セブとかけ算

以上、学生たちが中心に行った交流会の様子を紹介した。次に学期末に実施した意識調査について報告する。

3. アンケート調査

3.1 調査内容

これら 10 回の交流会を行なった後、活動に複数回参加してくれた H ゼミの学生を対象に年度末に振り返りのアンケート調査を無記名で行ったが、対象者 30 名の内、回収できたのは 22 名であった。倫理的配慮については、調査対象者に対し、本研究の目的及び個人情報の取り扱いなどを伝えた。アンケートは、無記名で実施するためグーグルフォームで行った。調査内容は、「1 年間の活動を振り返り、気づいたこと、学んだことなどを書いてください」という内容で振り返りの感想文を書いてもらった。

振り返り文をテキストデータとし、KH Coder を用いて単語と単語の関係を探るため、テキストマイニングの分析を行った（田中 2013、吉村他 2022）。KH Coder は、「計量テキスト分析もしくはテキストマイニングのためのフリーソフト」である（田中 2013:37）。まずは、同じ意味で使われた言葉は重複しないよう同じ単語で頻度分析できるように修正を加えた。そして、抽出語リストを作成し、視覚化するために共起ネットワークを作成した。

3.2 調査結果と分析・考察：共起ネットワーク

テキストデータ内にある語と語が一緒に出現することを「共起」と言い（田中 2013）、分析を行った結果、共起関係にある語の出現パターンを線で結んだ共起ネットワークを以下の図で示す(図 6)。線で結ばれているかどうかで互いが意味のある関係にあることがわかり、出現数が多いほど

大きい円で描かれている（田中 2013、吉村他 2022）。以下、それぞれの共起ネットワークについて述べていく。

60 以上の頻度を示した単語は、「やさしい日本語」、「日本語」で 40 以上は「子ども」「使う」「思う」などであった。サブグラフ検出を行なった結果、この共起ネットワーク図には 4 つの大きなグループと 2 つの小さなグループがあった。それぞれの単語とその共起関係については、図 6 を参照のこと。

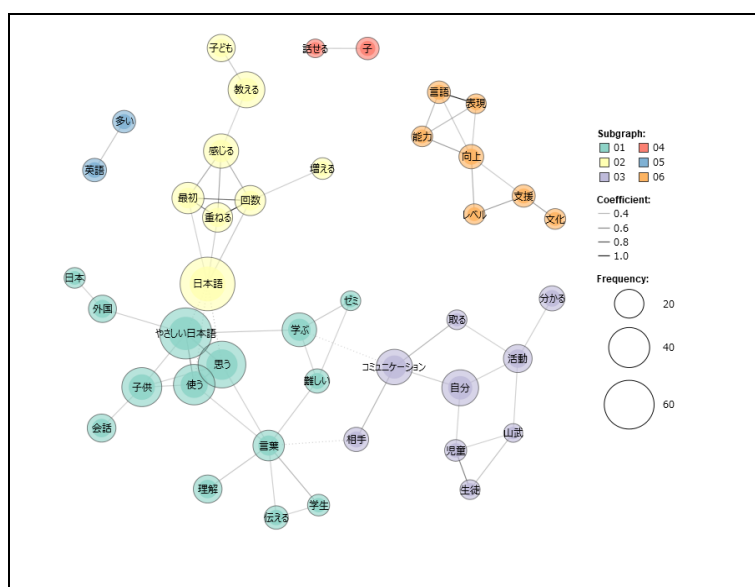


図 6. 共起ネットワーク（最小出現語 8）

そして、それぞれのグループを振り返り文テキストと合わせてカテゴリー化した。大きな語のグループの 1 つ目は【ゼミで学んだやさしい日本語の使用で言葉の理解や子どもたちとの会話がうまくいったと思う】が示されていた。これはゼミで日本語があまり話せない外国人とどのようにコミュニケーションするのか学んでおり、山武の活動を通して実践することで、できるようになっていったことがわかった。2 つ目のグループは、【最初は子どもたちに教えられるか不安で回を重ねるにつれ、教えられるようになった】であった。最初はどう教えたらいいのか、戸惑いがあったが、回を重ねていくうちに、徐々に子どもたちに理解してもらえるようになっていったことがわかった。そして 3 つ目のグループは、【活動を通じて自分のコミュニケーション力が上がった】であった。つまり、学生自身がこの活動での成長を感じていることがうかがえる。4 つ目のグループは、【子どもたちの言語表現の能力が向上した】であった。この点は、年度初めの頃と比較し、子どもたちの日本語は上手になっていることを学生たちが実感していることを示唆している。また、スリランカ人児童生徒は英語が通じるので意思疎通が図れたことも述べていた。

これらを共起ネットワークと調査の振り返りデータから分析すると、図 6 では、子どもたちへの日本語支援の様子の変化と自分たちの成長を見ることができた。そして、これらのことからスリランカ児童生徒に対する日本語支援は単なる支援ではなく、「やさしい日本語」の「実践の場」となっており、学生たちの運用能力が向上していることがわかった。しかし、データの量は十分ではなく、データ収集の方法や分析方法など再考する必要があると考える。

4. おわりに

本稿では、Hゼミの日本語支援に関する1年間の活動報告と終了後の振り返りアンケート調査の結果を報告した。交流会は、今年度で2年目の取り組みとなったが、前半は主に4年生が教材などを準備し、後半は3年生が準備をするという流れができ上がった。1年目は担当教員が手取り足取り、指導しなければならなかったが、2023年度の2年目は4年生が3年生に引き継ぐという形で、3年生は4年生のやり方を見て学んだ。

そして、大学生による交流会はゲームなどを取り入れ楽しく学ぶことができ、子どもたち同士が生き生きと活発に参加していることから、子どもたちの「憩いの場」となっていることが見てとれた。そして、この交流会に参加する子どもたちは学校も異なる場合が多いので、子どもたちの「交流の場」にもなっている。従って、この交流会は、山武市の受け入れ経験の少ないスリランカからの「外国人児童生徒のための日本語支援」の1つのあり方を形成したのではないかと筆者は思う。そして、大学生の「やさしい日本語」実践となる交流会の実施は、将来の多文化共生社会を牽引することのできる人材育成につながっているのではないだろうか。今後もこの交流会を継続し、地域外国人児童生徒の日本語支援に貢献したいと考える。

参考文献リスト

NPO 法人教育サポート GNN「山武市における子ども第三の居場所」

<https://gaasammu.wixsite.com/mysite/複製-事業内容> (2024.2.12 検索)

川村よし子 2012「日本語読解学習システム『リーディング・チュウ太』の取り組み『留学交流』ウェブマガジン, Vol. 19 独立行政法人日本学生支援機構, pp. 1-11

田中京子 (2013)「KH Coder と R を用いたネットワーク分析」『久留米大学コンピュタージャーナル』Vol. 28 pp. 37-52

長野県「やさしい日本語を使ってみよう」(2022.5.13 検索)

https://www.pref.nagano.lg.jp/kokusai/nihongo/yasashiinihongo_tsukaou.html

林千賀 (2023)「やさしい日本語」の学びを実践につなげるまでのプロセス-大学のゼミの学び-」『JIU 日本語教育実践報告集』第4号 pp. 43-54. 城西国際大学

吉村麻奈美・高垣マユミ・牛島順子 (2022)「女子大学生の教育実習にまつわる不安：面接のテキスト分析より」『津田塾大学紀要』第54号 111-124

(はやし ちが・城西国際大学 国際人文学部 国際交流学科／留学生別科)

2023 年度 編集委員

国際人文学部 国際交流学科／留学生別科 林 千賀
語学教育センター 高木 美嘉

JIU 日本語教育実践報告集 (Web 版)
JIU Journal of Japanese Language Teaching
5 号

2024 年 3 月 31 日発行
発行者 城西国際大学 日本語教育担当

発行所 城西国際大学
〒283-8555 千葉県東金市求名 1 番地
TEL (0475) 55-8800